

——それから、靈感でも閃いたものの輝くアーサーの方へ向いて）アーサー、お前は歌をうたふのに大變いい聲をもつてもつて噂をきくんだが、どうなんだい。ランドはお前の歌をきくほど楽しみなものはないと言つてたぜ——お前はあそこを訪問した晩はいつでも歌ふつていふぢやないか。どうしてこのうちのものには一度もたのしませてくれないんだい。

アーサー　（うれしくなるが、しかし、聲を傷つけられたといふ感じを依然として持つてゐるので）お父さんたち何でもかでも僕をへこませたがつてゐるのかと思つたもんだから。

ミラー夫人　（出しやばつて——誇らしげに）アーサーは本當にいい聲をもつてゐますよ。あなたのお留守のとき練習するんですの。あなたが歌がお好きだとは知りませんでしたわ、ナット。

ミラー　いや、好きだよ——歌ほど好きなものはないよ——僕がまだ子供の時分、とてもいい聲をしてゐたんで、みんなによく言はれたもんだよ——君はせひ

——（それから、突然、晩めしの時に思ひ出話で苦い經驗をもつたのを思ひ浮べて、うしろめたさうにあたりを見廻す）ふん。だけど、アーサー、何も自己の眞價をかくさなくともいいぢやないか。どうして今、ひとつか二つ歌つて聞かせてくれないんだね？　おい、ミルドレッド、お前、兄さんのために伴奏できるだろう。どうだ。

ミルドレッド　（頭をびよいと振つて）すくなくとも、エルジー・ランドぐらゐには弾けてよ。

アーサー　（彼女を無視し——勿體ふつて咳ばらひをして）僕、今夜、するぶん歌つたんです。ですから、聲が——

ミルドレッド　（恨みを忘れて、兄の手をつかんで引つばる）いらつしやいよ。謙遜するふりしなくてもいいわよ。見せびらかしたくてうじうじしてゐるんぢやないの。（この言葉が即座にアーサーを思ひとまらせる。怒つて彼女から腕をふり放す。）

アーサー　おい、放してくれ。(それから、不機嫌らしく勿體ぶつて) 僕、今夜歌ふ氣がしないんです、お父さん。今度にして下さい。

ミラー　 Mildred、お前、ちよつかい出すんぢやないよ。(アーサーに目配せして、再び心配さうな物思ひに沈んでゐるミラー夫人を、目で示し、うなづいてみせる。この無言の身振りによつて、彼が母親の氣持を紛らすために歌つてもらひたがつてゐるのを明らかにする。)

アーサー　(バイブをわきへやつて、すばやく立ちあがる) ああ——ようござんす。できるだけやつてみませう。(彼は Mildred のあとについて表の客間へはいり、電燈のスイッチをひねる。)

ミラー　(妻に) トミーの目をさますやうなことはないだらう。あいつ、何があつたつて大丈夫だ。それからシッドだが、あれも地震があつたつて眠つてる方だからな。(それから、突然、表の客間をすかし見て——不機嫌に) ちえつ、噂をすれば影とやらだ。シッドが来たよ。ぐつすり寝たんで、きつと酔がさめたら

う。(リリーは椅子から立ちあがつて、身をかくす場所を探してもするかのやうに、追はれるもののやうにあたりを見廻す。ミラーはなだめるやうに言ふ) リリー、あなたはそこへ掛けて、本でも読んでゐて、シッドには知らん顔してゐた方がいいよ。(彼女は再び腰をおろして、熱心に本をのぞきこむ。表の客間から、 Mildred が音階を練習するピアノの音がきこえてくる。その間にシッドが表の客間からはいつてくる。酒の昂奮がすっかり消えうせ、酔さめの厭な氣持に苦しんでゐる——神経質になり、氣分がわるく、陰鬱な悔恨にとらはれ、自己嫌惡と自己憐憫の苦々しい感情にさいなまれてゐる。目は血走つて、はれぼつたく、顔はふくれあがり、禿頭を縁どる髪の毛は亂れてもちやもちやになつてゐる。うしろめたさうに、體を斜めにして部屋へはいり、みんなを見るのを避けて目をきろきろさせてゐる。)

シッド　(弱々しい引きつったやうな薄笑ひをして) やあ。

ミラー　(思ひやりのある、わざと氣にとめない様子で) やあ、シッド。よく寝

たかい。(それから、シッドが辛うじて息をついて、もつと話をしようとした時
ミルドレッドの聲が表の客間から聞えてくる。「それ、ずるぶん長いこと弾いた
ことないけど、やってみるわ。」彼女は伴奏をはじめめる。ミラーはシッドに静か
にするやうにと手で合圖する) しいつ! アーサーがみんなに歌をきかせてくれ
るんだよ。(シッドは正面中央の本箱の端にもたれ、氣の毒なほどきまり悪さう
で落ちつきのない様子だが、さうかといつて他の場所へ動くのを神経質に恐れて
ゐる。アーサーが歌ひはじめる。彼はかなりいい聲をしてゐるが、その歌ひ方は
極度に訓練を経てゐない感傷的なものである。古いセンチメンタな流行歌「ち
や、わたしを忘れないでね」を歌ふ。聴き手にあたへる効果はすぐに現はれる。
ミラーは昔をしのぶ憂鬱な表情でちつと前を見つめる。その顔は靜かに悲しげに
年老いたやうに見える。ミラー夫人もちつと前を見つめてゐるが、その表情はい
よいよもの悲しさうになつてくる。リリーは本を讀むふりをするのを忘れ、ほん
やりそれを眺めてゐるだけで、顔は悲劇的に悲しさうになる。シッドはどうかと

言へば、彼は悔恨にさいなまれ罪に苦しむ意識のどん底にまで落ちこんでゐる。
唇の端をへしまげ、今にも泣かんばかりの様子である。歌が終る。ミラーははつ
と我にかへり、熱心に拍手して、呼ぶ) うまいぞ、アーサー! — うまいぞ! お
い、すばらしい聲ぢやないか。もつとやつてくれ。どうだい、エシー、氣に入つ
たらう。

ミラー夫人 (もの悲しさうに) ええ——でも、悲しい歌ね——とても悲しい歌
だわ。

シッド (やつと息をし、突然、言ひだす) ナット、エシー——それから、リリ
ー——僕は——僕はおわびしたいんだ——あんな風にして歸つてきたのを——僕
のやり方は——辯解しようもないんだが——氣持は決して——

ミラー (同情して) さうだとも、シッド。もうすんだことだよ、みんな。

ミラー夫人 (元氣を出して——愛情のこもつた憐れみの氣持で) そんな馬鹿な
こと言はなくてもいいのよ、シッド。園遊會がどんな様子だか分つてゐますか

ら。もう忘れておしまひなさい。(シッドの顔はすこし明るくなるが、その視線は無言の哀訴をこめてリリーの方へ移る。彼女が何か一言いつてくれればと思ふのだが、その一言が出てこない。彼女の目は本の上に釘づけにされ、體は緊張して硬ばつてゐる。)

シッド (必死になつて言ひ出す) リリー——すまなかつたよ——花火のと、許してくれるね? (しかし、リリーは執念ぶかく押し黙つてゐる。シッドの顔に苦惱にみちた表情が現はれる。表の客間で、ミルドレッドが「あたし、コーラスのとこきや知らないのよ」といふ聲がきこえる——そして、他の伴奏をはじめる。)

ミラー (シッドの困つてゐるのを救ひに来る) しいつ! 別の歌がはじまるよ。まあ、坐れよ、シッド。(シッドはうなだれて、左手前寄りの一番端へ逃れ、ソファの隅に腰をおろし、こつち向きになり、背を圓くし、腕を膝にのせ、両手で顔を支へる。その目は子供のやうに傷つけられ悲しみに充ちてゐる。アーサー

は流行歌「可愛い奴」を、全力をあげて感傷的な効果を一層強めて歌ふ。聴き手にたいする効果は前の歌と同様であるが、一層強められ——とくにシッドにたいしてそれが著るしい。歌が終ると、ミラーはまたはつとして、拍手喝采する) すごいぞ、アーサー! とてもうまかつたぞ! さうだな、エシー。

ミラー夫人 (もの悲しさうに) ええ——でも、こんな悲しい歌、うたつてもらはなきやよかつたわ。(それから、唇をふるはして) リチャードはいつでもあれを口笛で吹いてるんですもの。

ミラー (いそいで——呼ぶ) おい、アーサー、今度は何か陽氣なものやつてくれよ。變化をあらしめるためにね。

シッド (突然、リリーの方へ振りむき——涙で聲をつまらせ——自己批難の激情で) リリー、君の方がもつともだよ——僕を許してくれないのは當然だ——僕は碌でなしの人間で、これからだつてさうだらう! ——僕は何の役にも立たない、酔っぱらひの碌でなしだ! ——僕のことなんか齒牙にもかける必要がないん

だ！——僕は汚れはてた腐つた酔つばらひなんだ！——自分にも役に立たなければ、他の人間にも役に立たないんだ！——せめて自殺でもする勇氣があれば、厄介拂ひになるんだが！——それだけの勇氣さへないんだ！——僕は卑怯者だ！——卑怯な酔つばらひの碌でなしなんだ！（兩手で顔を掩ひ、小さな病氣の子のやうに嘔り泣きはじめる。それはリリーにとつて耐へがたいことである。彼女の苦い痛手も、彼を無視し罰しようとした鐵の如き決心も、一瞬にして消えさり、彼にたいする憐憫の愛情に壓倒される。彼女は走りよつて、彼に片腕をかけて抱き——やさしく衝動的にその禿頭に接吻さへして、彼が小さな子供でもあるかのやうに慰める。ミラー夫人も殆んど同じやうに感動して、やつぱり弟の方へ行かうとして立ちかけてゐたが、ミラーは目配せし、強く頭をふり、彼女に坐るやうにと合圖する。）

リリー　まあまあ！泣くんちやありませんよ、シッド。こんな様子を見てると、わたしは辛くて辛くて！ええ、ええ、許しますとも。わたし、いつだつて

許さないこと、なかつたんちやありませんか。あなたはそんなに御自分をお責めにならなくともいいのよ。だから、泣かないでね、シッド。

シッド　（涙にぬれた、へりくだつて感謝した、感動にあふれた顔を、彼女の方へあげる——しかし、その顔に淨められた良心が輝き出たので、生れつきの悪戯つ子らしい表情にかへりはじめてゐる）本當に許してくれますか——僕はそれだけの値打のない人間なんだが——本當に許してくれるんですか。

リリー　（やさしく）許すと言つたぢやありませんか、シッド——許しますとも。

シッド　（大きな仔犬が手をなめてゐるやうに、彼女の手にかしこまつて接吻する）有難う、リリー。本當に何と言つていいか——（表の客間で、アーサーが「教會で待つて」を陽氣に歌ひだす。最初の一二行がすむと、ミルドレッドがそれに加はる。シッドの顔は歌のよさを味ふやうに明るく輝き、リリーの手をしっかりと握つたまま、自動的に片方の足で拍子をとつてタップを踏みはじめ。手紙を廻してくれ。これは彼女が書いたのだ。）（歌がくると、彼は我慢ができなくな

つて、顫へる大聲で合はる。「今日お前と結婚するため、逃げ出すわけにはゆかないよ。女房の奴が放してくれないよ。」(歌が終ると、他の部屋の二人は笑ふ。ミラーもシッドも笑ふ。リリーはシッドの笑ひ顔につられて微笑する。ミラー夫人だけが、歌が耳にはいらなかつたかのやうに、悲しい物思ひに沈んでゐる。)

ミラー　すてきだぞ、アーサーにミルドレッド。とてもよかつたぞ。

シッド　(リリーの方へ向いて熱心に) ヴェスタ・ヴィクトリアがこの歌をうたふのを一度はきくべきだよ。全くすばらしいからな。僕は彼女がハマースタインのヴィクトリア(「ハマースタインは興行師、ヴィクトリアは劇場名」で歌ふのをきいたよ)——ほら、覚えてるでせう、僕がニューヨークへ旅行したあの時だ。

リリー　(彼女の顔は、急に、再び疲れたやうな悲しさうな表情になる——この旅行の或る部分に關する彼女の記憶は、シッドがいま彼女に思ひ出してもらひたがつてゐることとは、まさに反對のものだからである——彼女はしづかに彼の手から手を放して——絶望的な溜息をつく) ええ、覚えてゐますわ、シッド。(シ

ッドは一瞬間うしろめたい混亂に壓倒される。彼女はしづかに自分の椅子へ行つて、再び掛ける。表の客間では、この時から、ミルドレッドは流行歌を弾きはじめるが、すぐ行き詰つて、他の歌に移る。)

ミラー夫人　(突然に) 今、何時ですか、ナット。(それから、彼に答へるひまもあたへずに) ああ、わたし何か恐ろしいことでもあつたんぢやないかと氣になつてきましたわ、ナット。だつて、リチャードにどんなことが起らないとも限りませんもの。あなただつて、毎日、新聞で、子供が自動車に轢かれるのをお讀みでせう。

リリー　まあ、エシー、そんなことを仰しやつちやいけないわ。

ミラー　(自分も再び氣がかりになつてきたのを隠して、鋭く) あれこれと想像するのはおよし。

ミラー夫人　だつて、今夜は自動車をもつてる人はみんな外へ出てゐるでせうし、なかには酔つぱらつて運轉してゐる人も多いでせうから、自動車事故がない

なんてどうして考へられますか。それとも、あの子は海岸のドックへでも行つて、海へ落つちたかもしれないですよ。(ヒステリになりかけて) ああ、きつと何か恐ろしいことが起つたんだわ。それなのに、あなたときたらここに坐つて、歌をきいたり、笑つたりしてゐるだけで、まるで——なぜ何とかなさらないの？ なぜあの子を探しにお出にならないの？ (わつとばかりに涙にくれる。)

リリー (いそいでそばへ来て、彼女に片腕をかけて抱き) エシー、そんなに心配なさるもんぢやないわ。自分で自分を病氣にしまつてよ。リチャードは心配なことありません。わたしには、大丈夫だつてことが、ちゃんと感じてわかるんですよ。

ミルドレッド (表の客間から急いで出てきて) どうしたの？ (アーサーも戸口の彼女のそばに現はれる。ミルドレッドは母親のそばへ行つて、同じく片腕をかけて母を抱いて) 泣いちゃいけないわ、ママ。ディックはすぐ歸つてきてよ。待つててごらんさい。

アーサー さうだとも。すぐ歸つて來ますよ。

ミラー (立ちあがつてゐたが、顔をしかめて——眞面目に) 十二時がつきりに歸つてこなければ——探しに行かうと思つてたんだ。あいつ終電車の出たあとで、海岸から歩いてくるとしたら、うちへ着くのは丁度それ位の時刻になるんだ。だが、お前の氣が安まるといふんなら、すぐにも出かけるよ。自動車にのつて、海岸道路をドライブしてゆけば——途中で多分あいつを拾ひあげることになるだらう。(正面中央の本箱の隅にかけておいたネクタイとカラーをとつて、それを付けはじめ) アーサー、お前も一しよに來た方がいいなあ。

アーサー ええ、行きませう、お父さん。(突然、耳をすまして、言ふ) しいつ！
誰かヴェランダへ來たよ——こつちの戸口へ廻つたよ。きつとあいつだ。他に誰も——

ミラー夫人 ああ、有難い、有難い！

ミラー (きまり悪さうに微笑して) いまいましたい奴だ。みんなをこんなに心配

させたんだから、うんとやつつけてやるつもりだ。(仕切戸がげしく押しあけられて、リチャードがよろめきはいつてきて、明るいで目をしばたたきながら、しばらくふらふらして立つてゐる。その顔は練粉のやうに青ざめ、汗で光り、その目はどんよりとしてゐる。ズボンの膝がよこれ、片方はパーテンに蹴られて往來に匍ひつくばつたので破れてゐる。一同は呆氣にとられて彼を見、一瞬間、麻痺したやうになつて言葉が出ない。)

ミラー夫人　まあ、一體この子はどうしたといふんだらう！　氣がちがつたんだわ！　リチャード！

シッド　(誰よりも先に心の平靜を取りもどし——にたりとして) 氣がちがつた？　そんなことあるもんか。酔つてるだけだよ。

アーサー　あいつ酔つてるんだ。たしかにさうだ。(それから、シヨックをうけ、はげしく責める) 圖々しくなつたもんだな！　生意氣だぞ、貴様！　エールへ入れたら、さういふ圖々しさ、たたき出してやるぞ！

リチャード　(荒々しい反抗の身振りをして——涙つぱく芝居じみて)

きのふ備へたり、この日の狂亂に

あすの日の沈黙に、勝利に、はた絶望に。

いざ飲めよ！——

ミラー　(厳格な、怒つた顔になつて、威嚇するやうに一步進みでる) リチャード！　何だつてお前は——！

ミラー夫人　(ヒステリカルに) ふつちやいけないわ、ナット！　ふつちや——！

シッド　(ナットの腕をつかんで) 落ちつけ、ナット。癪癪おこしちや駄目だ。

今、怒鳴つたつて、何にもなりやしないよ。あいつ、自分のしてゐることが分らないんだから。

ミラー　(自分を制して、ちよつと恥しさうな表情になり) よしよし——シッド、君の言ふとほりだ。

リチャード　(酔つぱらひらしく自分のまきおこした騒動に得意になつて——劇

的に力を入れて朗讀する)「それから——僕は來ませう——葡萄の葉を髪にさして！」(度すべからざる嘲笑をこめて笑ふ。)

ミラー夫人

(自分の目を信じることができないかのやうに、鏡を見詰めて)リチャード！ 酔つてるのかい、お前！ 何ていけない、悪い子だね、お前は！

リチャード

(唇のあたりに強ひて意地わるい表情をうかべ、重著しい嘲笑をこめて引用する)「それを考へてごらん、ヘッダ！」(それから、彼の表情全體が突然變化する。青白い顔いろは、緑がかつた、船暈ひのやうな色あひになり、目は不安さうに心の中へ向けられたやうに見える——そして、一切のポーズがなくなり、小さな病氣の子供のやうに、母親に訴へるやうに呼びかける)「ママ！ 僕ね——気分がわるいんだよ！」(ミラー夫人は叫び聲をあげて、彼の方へ行かうとするが、シッドがそれをさへぎる。)

シッド この子の世話は、僕にまかせなさい、エシー。僕も以前にはかういふことがあつたもんだ。

ミラー

(妻を片手で抱いて)さうだ、シッドにまかせなさい。

シッド

(リチャードを抱いて——表の客間をとほつて連れ出しながら)おい、大將。二階へ行かう。仲よしのシッド叔父さんがうまくやつてやるよ。この叔父さんがお手本を書いたんだからな。

ミラー夫人

(うしろ姿を見詰めるながら——まだ茫然とした氣持で)ああ、恐ろしいことだわ。まあ、うちのリチャードがですよ。あの子がヘッダがどうか言つたのをお聞きになつたでせう。きつと例の悪い女のひとりとしよにゐたんですよ——きつとさうですよ——まあ、うちのリチャードが！ (ミラーの肩に顔を埋めて、心を打ちくだかれたやうに啜り泣く。)

ミラー

(疲れたやうな、困惑した、深い苦惱にみちた表情で——彼女を慰めながら)さあ、さあ、そんな風に考へちやいけないよ。そんな風に考へちや。なあ、エシー。(リリー、ミルドレッド、アーサーは、恐れ立ちすくんだやうな表情で、ぎこちなく、そこいらに立つてゐる。)

——幕——

第四幕

第一場

同じくミラー家の居間——次の日の午後の一時頃。

幕があがると、家族のものが、リチャードをのそいで、食堂で晝の食事をすませて奥の客間をとほつて出てくるのが見える。ミラーと妻が最初に出てくる。彼の顔は、眉をひそめた厳しい表情で硬ばつてゐる。ミラー夫人の顔は引きつつて苦惱の色がみえる。彼女は明らかに、一夜を不眠と涙のうちで明かして、それからまだすこしも休息してゐないのである。シッドは元のシッドにかへつてゐて、彼にわづかでもかかはりのあることが昨日何ひとつ起らなかつたかのやうに、その表情はきはめて無邪氣である。そして、血走つた目と弱つた氣力のほかは、ひどく眠さうにしてゐるだけで、何ら二日酔の様子がみえない。リリーは靜かにも悲しさうであり沈

んでゐる。アーサーは誰も文句の言ひやうのない立派な若者だと自負してゐる。ミルドレッドとトミーは、こつそり父親を注視しながら、おとなしくしてゐる。

彼らは縦に一行をつくつて、無言のまま居間へはいつて、銘々が一番先に腰をかけるのを恐れてでもゐるかのやうに、落ちつきなくそこいらに突つ立つてゐる。その雰圍氣たるや、葬儀に列してゐるかのやうに、ものものしいばかりに嚴肅である。一同の目はこの家の主人の上に釘づけにされたままである。彼は右手の窓ぎはに行つて、顔をしかめながら外に目をやり、荒々しく小楊子を噛んでゐる。

ミラー (いら立たしさうに) 馬鹿々々しい。社へかへつて一仕事すりやよかつた。今日ちゆうに片づけなきやならない用件が山ほどあるのに。

ミラー夫人 (批難するやうに) まさかあの子に會はないでかへると仰しやるんぢやないでせうね。あなたの義務として——!

ミラー (むつとして) 會はずに歸ると誰が言つた。さういきなり結論へ飛躍し

ないでもらひたいな。僕は一體ほかにどんな用があつて歸つてきたんだね。忙しい日にはお晝をたべにうちへ歸つて來ないのが普通ぢやないか。僕はただかういふことが起つてくれなきやよかつたと、さう思つてゐただけなんだ——折もあらうにこんな特別なときにさ。(ひどく言ひ足りなさうに言葉をきる。今當面してゐる事實が念頭に離れないのでいらいらしてゐる。)

トミー (落ちつきなくも、そ、も、そとしてゐたが——不安な空氣にもはや耐えきれなくなつて) ディック兄さん何したの? どうして誰も僕に話してくれないの、びくびくしてゐて。

ミラー (これを助けの綱とばかりにとらへて——向きなほつて、この末つ子を嚴しい禁止するやうな目で見すえて) こら、坊主、お前をこれまでぶつたことがないからつて、いつでもさうだと思つたら大違ひだぞ! お前は近頃ふたれたくてもうすうすしてゐるやうだな。こつちから口をさくまで黙つてゐなさい——さも

ないと、いいか、痛い目にあふぞ。

ミラー夫人 さうですよ、トミー。おとなしくしてゐて、お父さんに煩さくするんぢやありません、(それから、夫に警告するやうに) ナット、言葉に氣をつけて頂戴。子供は耳が早くて油断ができませんから。

ミラー (命令的に) 子供たちは出てゆきなさい——みんな。何だつて始終うちの中をうろうろしてゐるんだ。外へ出て、庭で遊ぶとか、散歩するとかして、新鮮な空氣を吸つて來い。(ミルドレッドはトミーの手をとつて、表の客間をとほつて連れてゆく。アーサーは「子供たち」といふ言ひ方が自分には當てはまらないと考へでもするやうに、二の足を踏む。父親はこれを見てとつて——氣短かに) お前もだ、アーサー。(彼は威嚴を傷つけながらも強ひて勿體ぶつて出てゆく。)

リリー (氣轉をきかせて) わたしも散歩して來ようかと思ひますわ。(表の客間から出てゆく。シッドはそのあとについて行かうとするかのやうに動く。)

ミラー シッド、君にはゐてもらひたいんだがなあ——なに、ちよつとだ。

シッド　いいとも。(テーブルの右手後方の揺り椅子に腰をおろして、すぐ欠伸をする) ちえつ、元気がないぞ。今日はどうしたのか、われながら分らないよ。どうも目を開けてゐられさうもない。

ミラー　(痛烈な皮肉で) 多分、昨日の園遊會で飲んだあの悪魔のチャウダー〔寄せ鍋料理〕に中毒したんだらう。(シッドは恥しさを露わにした表情をし、無理にやつと笑はうとする。それから、ミラーは不愉快なものに決然として直面するもの態度で、妻に向つて) リチャードはどこにゐるんだ!

ミラー夫人　(どきまぎして) まだ寢床にゐるんですの。罰として寢床から出ちやいけないって言つておいたんです——それに、あんなに氣分を悪くしたあとですから、どのみち、さうした方がいいと思ひましてね。でも、氣分はもういいんですつて。

シッド　(また欠伸をして) むろん、さうだらう。若い時分には、どんな無理をとほしたつて、さうへばるもんぢやないからなあ。僕だつて覺えがあるが、そん

なことのあつた翌朝、まるで雛菊の花みたいに晴々とした氣分で、二階から下りて来て、朝めしをたべたもんだ——ポークチョップに、玉葱のフライに——(やましさを言葉にきる。)

ミラー　(辛辣に) そいつあ、海老の殻をくつて鐵の如き體をこわす前の話だらう。

ミラー夫人　(弟を厳しく見て) わたしなら、あなたの立場にゐたら、口をつぐんでゐますねえ。(それから、夫の方へ向いて) リチャードはきつと氣分がいいんですよ。わたしが二階へ持たせてやつたお晝の食事をすつかり喰べたつて、ノーラがさう言つてましたから。

ミラー　おれはまた、お前が何にも喰べさせないのかと思つてたよ——罰として。

ミラー夫人　(うらめしさうに) でも——あの子も、體が弱つてゐることですし——さうするのが一番いいと思つたもんですから——(それから、自分を防禦す

るやうに)ですが、わたしがあの子を罰しなかつたなどとお考へなさらないでね。急には忘れられないほど、十分叱つたおきましたから。それに、本當の罰はこれからだつてことを、よく言ひきかせておきましたよ——あなたがお晝の食事にわざわざお歸りになるつてことや——さうすりや、あんな大それたことをすればお父さんがどんなに厳しくお叱りになるか分るだらうつてことを。

ミラー (不快さうに動いて) ふむ!

ミラー夫人 本當に、さうしていただくのが、あなたの義務ですよ——思ひきり厳しく罰してやつて頂戴。あの子があんな大それたことをするなんて考へると——(それから性急に)ですけど、ナット、どんな風に叱つたらいいか、氣をつけて下さいよ。ようござんすか、氣質はあなたにそっくりなんですよ——自分のこととなると、とても氣にする方なんですから。それに、あの子があんなことを仕でかしたもとはといへば、あの馬鹿娘のミューリエルとあの馬鹿親爺のせいですわ——それから、わたしたちみんなが一日ちゆうあの子をからかつたり、あの子

の感情を害したり——あなたまでが癪癪をおこして、晩御飯のあとであの子が出てゆく前に、あんなにひどく當りちらしたりなさるんですもの。

ミラー (心外さうに) わかつたよ。この話の廻つてゆく先は、結局、僕の過失だつたことに落ちつくんだらう。

ミラー夫人 いいえ、わたし、そんなこと申したんぢやありません。また癪癪をお起しになつちや駄目ですよ。それに、これにはもう一つ問題があるんですよ。リチャードはひとりぢやあんなことの出来る子ぢやないつてこと、あなただつてよくお分りでせう。だつて、あの子には、やり方さへ分らないでせうからね。きつと誰かに感化されて、連れてゆかれたのにきまつてゐます。

ミラー うん、そりや僕もさう思ふ。そいつ誰だか、あいつから聞きだしたかい。(それから、腹立たしさに) 畜生、誰だらうと、そいつに思ひ知らせせてやるぞ。

ミラー夫人 ところが、あの子つたら誰かが一しよだつてことを、どうしても認

めようとしません。 (それから勝ち誇つたやうに) でも、あの子から嘆き出したことが一つあるんです。——わたしもそれですつかり安心しましたわ。だつてあの子が例の悪い女の一人と一しよだつたんぢやないかと、わたしとても心配してゐたでせう。ところが、ヘツダなんて女のゐないつてことが分つたんです。あの子の讀んでゐる本の中に出してくる女なんですつて。ヘツダなんて女、實際には知らないつて誓ひましたの。あたしもさうだと信じますわ。だつて、あの子は、わたしがそんなことを考へてたといふだけで、とても不愉快がつてゐましたから。 (それから、前後ちぐはぐに) ですから、とにかく——わたしが考へてゐたほどそれほど、悪いことがあつたんぢやないやうな気がしてゐるんです。 (それから、すばやく、ぶりぶりしながら) でも、悪いことはたしかに悪いんです——やつぱり、うんと叱つてやつていただかなくては。あんな年頃の子供がと思ふと——！ わたし、すぐ二階へあがつて、あの子に着物をきかへるやうに言ひませうか。あなた、お會ひになるでせう。

ミラー (仕方なく——いらいらしながら) 會はう。お前の話をききながら、一日無駄にするわけにもゆかないからな。

ミラー夫人 (心配さうに) ねえ、ナット、癪癪をおこしちやいけませんよ。ようござんすか。(表の客間をとほつて出てゆく。)

ミラー 女なんて奴は、ちえッ、いまましい。いつだつて人に巻添へをくはせやがる。女の心には、論理の何たるかが分らないんだ、(それから、シッドの居眠りしてゐるのに気がついて——鋭く) シッド！

シッド (目をしばたいて——機械的に) うん、そりやさうだよ。(それから、あわてて) なんて言つたんだい、ナット。

ミラー (痛烈に) 僕が何にも言はないのに、君はそれをききたいつてのかい。(いらいらして) 一體、僕を助けてくれる気があるのか、ないのかい。助けてくれる気があるんなら、しやんと目をさまして、頭を働かせたらどうだ。こいつあ、エシーが考へてるよりは遙かに重大なことなんだ。あいつは昨夜リチャード

の酒の席に女はひとりもゐなかつたと思つてゐるんだ——ところが、僕は偶然のことで、女のゐたのが分つたんだ。(ポケットから一通の手紙を出して) この手紙はね、今朝、どつかの女が社の玄關にゐるボーイの一人において行つたものなんだ——僕に面會を求めないで、ただ僕にわたしてくれと言つてつたんださうだ。ボーイの話では、一度も見かけたことのない女で——淫賣のやうな様子をしてゐたといふんだ。(手紙を開いてゐたが、讀む)「あんた様の御子息は昨夜楽しき海濱ホテル—お酒をのんでとても酔つぱらひました。あすこのパーテンは、御子息が丁年末満だといふこと知つてゐるくせに、お酒のませたんです。御子息をふらふらにさせるのが、面白いお笑草だと思つたんでせう。かりにもあんた様に勇氣があるなら、あの悪黨をこの町から追つぱらひなさるでせうね。」おい、これをどう考へるね、女の筆蹟だよ——むろん署名はないがね。

シッド たしかに、例の女の一人だ——そのお上品な言葉から判断すると。

ミラー おい、この筆蹟に見覚えがないかい。

シッド (批難するやうな表情で) おい、ナット、いやだな。僕がこの町の淫賣全部と文通してゐるやうに取れるぢやないか。(手紙を見ながら) さあ、誰だか分らないねえ。(手紙をかへしながら) だが、察するところ、この御婦人、パーテンと衝突して、その敵討がしたいんぢやないのかい。

ミラー (苦りきつて) 僕の察するところでは、その揉めごとのある前に、この御婦人リチャードをつかまへたにちがひないよ——でなきや、リチャードがどこの誰だかどうして分るんだい——そして、リチャードをその暖味屋へくはへこんだつてわけだらう。

シッド うん、さうかもしれない。楽しき海濱ホテルつてのは、何のことはない、淫賣宿なんだから——(急いで) すくなくとも、さういふ話だよ、人の噂では。

ミラー 何しろあいつのその時の氣持としちや、ミューリエルを恨んでさういふ馬鹿げたことをやつたかもしれないよ——淫賣をつかまへるなんてことをさ。そ

こで、淫賣の方ちや、あいつを酔っぱらはせた上で――

シッド うん、さういふことがあつたかもしれない――或ひはなかつたかもしれない。一體、どうしてそれを明らかにすることができるといふ。楽しき海濱ホテルちや、そんなこと知らないつて嘘をつくだらうしさ。

ミラー (率直に、誇らしげに) リチャードは嘘はつかないよ。

シッド あの子が昨夜あつたことを全部覚えてゐないからつて責めちやいけないぜ。(それから眞面目に心配して) 僕は、あんたの方が見當ちがひであればいいと思ふな。ああいふ種類の女は、ディックのやうな子供には危険だよ――いろんな點で。僕の言ふことわかるだらう。

ミラー (顔をしかめて) わかるよ――だからこそ、僕も心配してゐるんだ。ええい、何としてもあいつと率直に話し合はなくてはなるまい――女だとか、さういつた事柄について。もうとつくに、さういふ話をしてゐなくちやいけないかつたんだ。

シッド さうだよ。さうすべきだよ。

ミラー 二三遍切りだしてみようとしたんだがね。ウィルバーやローレンスや、それからアーサーには、さういふ時機がきたとき、うまく話ができただよ――ところが、畜生、リチャードにはどうもいけない。いつもこつちが氣恥しくて、うまく話が切り出せないんだ。君も感じてゐるだらうが、あいつは書物をたねにいろいろ大膽な話をするんだが、心は全く純真そのものだからな。

シッド そりやさうだ。僕だつて、さういふ仕事は苦手だよ。(それから、間をおいて――好奇心をもつて) あの子の過失について、どんな風に罰しようかと考へてゐるんだね。

ミラー (顔をしかめて) 正直なところ、シッド、僕にはさっぱり見當がつかないんだ。最初あいつに當つてみて、あいつがどういふ氣持でゐるか、萬事はそれを知つた上でのことだよ。それから先は、暗闇で鐵砲をうつやうなものさ。

シッド 君といふものをよく知つてゐなければ、あの子にあんまり辛く當ると

言ひたいとこだがね。(すこし苦々しさうに微笑して) 君も覚えてゐるだらうが、僕ときちやいつも叱られどほしだつたからな——それが僕にどれだけ役に立つたかは——まさにごらんのとほりさ。

ミラー (やさしく) なに、君よりも悪いのが、そこいらにごろごろしてゐるさ。さう自慢しちやいけないよ。(それから、表の客間から物音がするので——溜息ついて) やれやれ、いよいよ悪い奴が御入來だぞ。

シッド (立ちあがつて) ちや、僕は退去としよう。(しかし、戸口に姿をあらはしたのはミラー夫人で、うしろめいたやうな、身を守るやうな様子をしてゐる。シッドは再び腰をおろす。)

ミラー夫人 すみません、ナット——あの子はぐつすり眠つてゐるんで、どうしても起す氣になれなかつたんです。目をさますのを待つてたんですけれど、起きないんです。

ミラー (ほつとしたが、それが恥しいので、その氣持をかくしながら——ぶり

ぶりして) ふん、いよいよ以ていまましい話だ。かりにもお前が——

ミラー夫人 (自分の方から攻勢に出て) わたしに向つて癪癪をおこしちや駄目ですよ、ナット。あの子は今日は眠れるだけ眠る必要があるから、あなたにだつておわかりでせうに——昨夜、あんな騒ぎのあつたあとですもの。あの子がまた病氣になつてもいいとお考へなんですか。それに、あなたにとつちや、どつちにしたつて變りがないちやありませんか。晩御飯にお歸りの時だつてお會ひになれるちやありませんか。おやおや、あなたがそんなに御機嫌のわるいの見えなことがないわ。あの子を罰するのが待ち遠しくて待ちきれないやうですね。

ミラー (かつとなつて) おい、おれはいつまで待つたら——(それから突然、笑ふ) 話したつて無駄だ。お前の勝ちだよ、お前の。だけど、僕は今夜食事にかへらないつて斷つてあるの、お前、百も承知のはすちやないか。僕はジャック・ロースンに會ふ約束になつてゐるんだよ。廣告がどつさり取れるかもしれないし、大事な仕事なんだ。

ミラー夫人　　ちや、いつでもお歸りになつた時、お會ひになればいいわ。

ミラー　　（この延期で明らかにはつとしたのを、怒氣を帯びた態度でかくしなから）よろしい！　よろしい！　諦めたよ！　僕は社へ歸る！（表の客間へ行きかける）忙しい日に大の男をわざわざここまで歸らしておいて、お前つたら——全く考のない話だ——（出てゆく。間もなく戸のしまる音がきこえる。）

ミラー夫人　　まあまあ！　ナットがあんなに機嫌をわるくしたの見たことがないわ。

シッド　　（くつくつ笑つて）機嫌がわるいて、馬鹿な！　どうしていいか分らないんで、すこしの間でも逃げだしたくて、うすうすしてゐたのさ。

ミラー夫人　　（鼻のさきで笑つて）あの人のことなら、あなたよりもわたしの方がよく知つてるつもりよ。（それから、部屋中をいそがしさうに歩きまはつて、あれこれと整頓し、その間、シッドは眠さうに欠伸をし、目をしばたいてゐる）まるで赤ん坊のやうに眠つてゐるんですよ——とても無邪氣な顔で。あなただつ

て、あの子なら誘惑されさうもないつて思ふでせう。ところが、見かけちや判断できないものねえ——あなた自身の子供の場合だつてさうよ。あの子がいい證據だわ。驚いたわね。

シッド　　（眠さうに）なあに、エシー、ディックは大丈夫だよ。心配することはないよ。

ミラー夫人　　（鼻の先で笑つて）そりやね、あなたはさう言ひたいところでせうよ。きつとこの次には、あの子を連れだして、馬鹿騒ぎのらんちき騒ぎをやらうつてんでせう。（彼女が話してゐるとき、リチャードは居間からおりてきて戸口へ姿をあらはす。彼は昨夜の経験から何らの悪い影響も受けてゐない。事實、驚くほど健康にみえる。古い服を着込んでゐるが、いそいで引つかけたやうな様子である。その表情には、自分を守るやうな太々しさのまざつた見苦しい疚しさうな色がみえる。）

リチャード　　（意識してそしらぬ風に、母親を無視しながら）やあ、シッド叔父

さん。

ミラー夫人 (彼の方へ振りむいて) おや、お前ここで何してゐるんだね。寝てゐるのかと思つてたのに。すゐぶん早く目がさめたもんだね——お父さんがお出かけになるとすぐにさ。

リチャード (不機嫌に) 眠つてやしなかつたんだ。僕、ママが部屋へはいつてきたの、物音で知つてるよ。

ミラー夫人 (氣持を害して) ちや、何かい、お前はわざとだまして——

リチャード だましやしませんよ。ママは僕が眠つてるかどうかきかなかつたぢやないか。

ミラー夫人 結局、同じことですよ、そんなこと。昨夜あんな悪いことをしただけちや足りなくて、今度は嘘つきにならうつてのかい。

リチャード 僕、嘘をついてやしません、ママ。僕に眠つてるのかとおききになれば、眠つてゐないつてお答へしたでせう。

ミラー夫人 お母さんはね、お前にすぐ寢床へもどつて、ちつとしてゐてもらひたいね。

リチャード ええ、何のためです、ママ。寝てゐたつて、頭がいたくなるだけですよ。

ミラー夫人 頭がいたくなるのは寝てゐるせいぢやありませんよ。それはお前にだつて分つてるでせうに。それにさ、お母さんが馬鹿のやうにあすこに突つ立つて、お前のことを可哀さうに思つてゐたのを考へてごらん——お父さんと衝突までしてさ。とにかく、今夜お父さんがお歸りになるまで待つておいで！ さうすりや分るでせうから。

リチャード (不機嫌に) 平氣さ。

ミラー夫人 平氣ですつて。まあ、お前の口のききやうつたら、昨夜あんなことをしておきながら、すまないとも何とも思つてゐないやうだねえ。

リチャード (反抗するやうに) すまないと思ひません。

ミラー夫人 リチャード！ 恥しいと思ひなさい！ お母さんにはね、お前がすつかり悪くなつたやうに思へてきましたよ。本當に。

リチャード (いたましいばかりに悄然として) 僕、自分のしたこと、人が僕にしたこと、そのほか何もかも、これつぼちも氣にならないから、悪かつたつて氣が起らないんです。もうあんなこと二度とする氣はありません。

ミラー夫人 (この言葉をとらへて、いくらか心持をやわらげ) さう、とにかくお前がそんな風に言つてくれれば、お母さんも安心ですよ。

リチャード ですけど、僕、ああいふこと悪かつたと思ふからでもなければ、時代おくれの道德觀念から言つてるんでもありません。一向面白くなかつたからなんです。あんなこと、僕にとつちや幸福でもなければ、面白くもないんです、シッド叔父さんとちがつて――

シッド (眠さうに) ええ、何だつて？ 誰が面白いんだつて？

リチャード (それを無視して) あんなこと、僕をよけいに悲しくさせるだけな

んです――いやな氣持に――だから、僕、あんなことに何の意味も見つけることができません。

ミラー夫人 お前、今度はしつかりしたことをお話しだね。それでこそいい子ですよ。

リチャード しかし、一度はあんなことやつてみたのを後悔しちやみません――

オスカー・ワイルドの言ふやうに、感覺の手段によつて魂を癒すつてことをね。

(それから絶望的な悲觀主義になつて) しかし、僕が何をしようがしまいが、それがどうだといふんだ。人生なんて結局、馬鹿げた喜劇さ！ 僕にはもうたくさんだ！ (にやりと不吉の薄笑ひをして) そこいらにガブラー將軍のピストルがころがつてゐなくて仕合せさ。もしころがつてゐれば、僕がこれ以上こんな喜劇に我慢するかどうか、お母さんには分るでせうから。

ミラー夫人 (この威嚇に動かされて、心配さうに――しかし、うはべは嘲笑を装つて) ガブラー將軍つて何のことだか知らないけど――いづれあのいまいまし

い本に出てくることなんだらうよ——だけど、お前がそんな風に話をする時は、お前は全くお喋べりの大馬鹿將軍だよ。

リチャード (陰氣に) だから、お母さんには僕のことかまるで分らないんだ。

ミラー夫人 (心配にまけて) 人生がどうの、ピストルがどうのつて——そんな恐ろしいことを言はないでくれ。お母さんを死ぬほど心配させたいのかい、お前は。

リチャード (今度は、安心させるやうに超然たる態度になつて) ママ、心配する必要ないんだよ。僕の絶望がかかる言葉を吐かせただけなんだ。しかし、僕は卑怯者ぢやないよ。僕は直面するんだ——運命に。

ミラー夫人 (當惑したやうに、立つて彼を眺めながら——それから、溜息とともに断念して) どう考へてみても、お前のやうな妙な子はゐやしないよ。(それから、心配さうに、彼の額に手をあてて) 頭痛はどうなの？ プロモ・セルツェル〔臭化炭酸水〕でも持つてきてあげようか。

リチャード (閉口して——不快さうに) いいえ、ようござんす。ああ、ああ、

お母さんときたら何にもわからないんだ。

ミラー夫人 いいえ、これだけはわかりますよ。みんなお前の肝臓のせいなんだよ。〔肝臓がわるいと、痲癢をおこしたり、女の子のことが氣になつたりするとさふぶ。〕あすの朝、鹽劑をどつさり飲むといいよ。いいえ、冗談に言つてるんぢやありませんよ。(それから、突然) おやおや、一體何時かしら。山の手へ行く用があつたのに。(表の客間の戸口へゆき——振りかへつて) お前、ここにゐるんですよ、リチャード。ようござんすか。今日は外出は許しませんよ——罰として。(いそいで出てゆく。リチャードは悲劇的な憂鬱さに沈みながら腰をかける。シツドは目をつぶつたまま、眠さうに彼に話しかける。)

シツド おい、仲間の酒徳利、どうしたい——親友ダウイの言ひ草をかりればだね。二日酔か。

リチャード (はつとして——恥しさうに) その話、引っぱり出すの、よして下

さい、叔父さん。僕、もう二度とあんな馬鹿な真似しようとは思ひません、本當に。

シッド (眠さうに皮肉な調子で——しかし、お終ひの方には多少の苦々しさがまじらないでもない) 誰かが同じやうなことを言ふのを、前にも聞いたことがあつたつけ。はて、誰だつたかな。たしか、シッド・デーヴィスぢやなかつたかな。さうだ、シッド・デーヴィスの奴がそつくり同じことを言ふのを千遍もきいたものだ。遠えねえ。だが、それでもなほ、あいつ馬鹿な真似をやめないんだ。あいつの言ふことを本氣にとつちやいけませんよ。あいつは變りもんなんだ、シッドつて奴は。

リチャード (陰氣に) 僕、必死だつたんです、叔父さん——たとへあの女にそれだけの値打がないとしても。僕、心の底まで傷つけられました。

シッド 僕なら、いのちの底までつて言ふね——その方が粹だぜ。(それから、悲しさうに) だけど、無理もないよ。戀なんて、可哀さうに若いものには地獄の責

め苦だからな。(リチャードは不快になり、輕蔑して答へない。シッドは顎を胸に押しつけ、うるさく呼吸の音をさせはじめ、殆んど眠りこむ。リチャードは厭惡の目差して、彼をちらと見る。ヴェランダへ誰か來た物音がして、仕切戸があいて、ミルドレッドがはいつてくる。彼女は叔父を見て微笑し、それからリチャードを見てびくりとする。)

ミルドレッド まあ！ お許しが出たの？

リチャード ひろん、さうさ。

ミルドレッド (テーブルの右手前寄りの、父親の椅子のところへ來て、腰をかけ) ババ、どんな風に罰して？

リチャード 罰しやしないよ。僕に會はないで、社へ歸つたよ。

ミルドレッド ちや、あとでつかまつてよ。(それから批難するやうに) 當然だわ、それが。昨夜どんなひどい様子をしてゐたか、自分で分りさへすればねえ！

リチャード おい、そんなこと忘れちまへよ、ええ？

ミルドレッド　ちや、またあんなことするつもりなの？　あたし、それが知りた
いのよ。

リチャード　それがお前にどうだといふんだ。

ミルドレッド　（昂奮を押へながら）もしね、兄さんがもうあんなことしないつ
て、眞面目に誓はなければ——いいもの持つてきたんだけど、あげないわよ。

リチャード　からかふのはよせよ。何にも持つてやしないんだらう。

ミルドレッド　ところが、持つてるの。

リチャード　何だ？

ミルドレッド　ほら、知りたいんでせう。あたし、三つ謎をかけるわよ。

リチャード　（輕蔑するやうに勿體ぶつて）人困らせはよせ。僕は子供相手に謎
謎遊びをする気分にはなれないんだ。

ミルドレッド　いいわよ、威張らうつてんなら。とにかく、兄さんまだ誓つて
ないのよ。

リチャード　（今は鋭い好奇心のとりこになつて）ちや誓ふよ。何だい、一體。

ミルドレッド　兄さんは世界中でなにが一番好き？

リチャード　さあ、何かな。

ミルドレッド　へえ、それでゐて戀をしてゐるつもりなの？　ミューリエルに言
ひつけてもいいの？

リチャード　（息をのんで）ちや——ミューリエルから？

ミルドレッド　（笑ひながら）兄さんを迷はせるの、罪のやうだわね。ええ、さ
う。ミューリエルからよ。あたし、丁度いまミューリエルの家のそばをとほ
と、あの人、應接間の窓から手をふつてゐるのよ。いそいでそばへ行くと、あの
人これをディックに渡してくれつて言ふの。あの人ほかに何にも言ふチャンスが
なかつたの。だつて、お母さんがあの人と呼んでね、ほかの人と話しちゃいけな
いって言ふんだもん。だから、あたし受けとつてきたわ——はい、これ。（彼女
は、幾重にもたたんで小さい四角な形にした手紙をリチャードにわたす。リチャ

ードは夢中になつて頼へながらそれを読む。ミルドレッドは好奇心をもつてそれを眺めてゐるが——氣取つて溜息する) ああ、あ、兄さんみたいに戀をしてゐるつて、いいものらしいわね——たつた一人のひとと。

リチャード (目を輝かせながら) おい、ミッド、ミューリエルが何て言つてるか分るか——この前の手紙で言つてゐることは、一言だつて本當ぢやないんだつて。親爺の命令で書いたんだよ。ミューリエルはね、僕を、僕だけを愛してゐて、うちの者からどんな罰をうけようと、いつまでも愛するつて!

ミルドレッド まあ! あの人にそんな勇氣があると思はなかつたわ。

リチャード へん! 君はミューリエルを知らないんだ。自分の魂が自分のものだといふのを怖がるやんな女と、僕が戀愛することができるとでも思ふのかい。ふん、できるもんか。(それから一層うれしうに) それにね、ミューリエルは今夜何とかしてこつそり脱けだして、僕に會ふといふんだ。大丈夫さうできると思ふつて、さう言ふんだ。(それから突然、ミルドレッドを前にしてこんなに熱狂す

るのは、皮肉な悲觀論者としては全く間違つた調子だと感じて——苦々しい作り笑ひをして) ふん! ミューリエルの方で辛抱できないつてことが、僕にはよく分つてゐるんだ——また僕にあひたいつて言つてくるだらうつてことがね。(皮肉に、間違つた引用をする)「女つてもものは、いつ暮がおりたか知らないんだ。だからいつでも次の場面を待つてゐる。」

ミルドレッド それ、本當? 氣取り屋ね、兄さんは。

リチャード (問題を熟慮してゐるかのやうに) 僕、この約束を守ることを同意したもんかどうかと考へてゐるんだ。

ミルドレッド 考へるも何もないぢやないの。兄さん外出が許されてないんでせう、お馬鹿さんね。だから、同意しようにもできないぢやないのさ。

リチャード (あらゆる扮飾をかなぐりすてて——反抗的に) ちや、何か、僕ができないつていふのか! できるかできないか見てゐたまへ! 僕は今夜ミューリエルに會ふよ。そのために、もうそれつきり何にもできないとしてもだ。あと

でどんな罰をうけようと構ふもんか。

Mildレッド (感嘆するやうに) へえ！ 兄さんにそんな勇氣があるとは夢にも思はなかつたわ。

リチャード おい、ミッド、お前知らん顔してゐるつて約束するねえ——僕がここを出てゆくまで——それからあとで、僕がどこへ行つたか、パパやママに話せばいいさ——つまり、昨夜のやうに僕がゐないんで心配するといけないから。

Mildレッド ええ、いいわ。ただね、あたしが何かお願ひしたら、してくれなくちや駄目よ。

リチャード むろん、してやるよ。(それから昂奮して) おい、ミッド。丁度今が、ここを出てゆくの絶好のチャンスだよ——誰もうちにゐないから。ママはすぐに歸つてくるだらうし、さうすりや僕を猫みたいに監視するだらうしさ——(奥の客間の方へゆく) ちや、行くよ。裏手からこつそり出てゆくつもりだ。

Mildレッド (昂奮して) だけど、日が暮れるまでどうするの？ すみぶん待

たなくちやならないわよ。

リチャード いくら待つたつて構ふもんか。(今度はひどく眞面目になつて) 僕はミューリエルのことを聞いて——夢をみてゐるよ。百萬年だつて待つてやる——ミューリエルのためなら何でもないさ。(妹をちらと俤らぶつて蔑むやうに見て) お前の困つたこといへば、戀愛の何たるかを解しないことだ。(奥の客間をとほつて去る。Mildレッドは感嘆するやうにそのうしろ姿を見送る。シッドはふつと息をふき、平和に軒をかきはじめる。)

—幕—

第二場

港に沿つた海岸の一部。左手に、黒い土の堤防が海岸に沿つて斜めにうしろへ走り、その堤防を境として海岸の砂地が終つて、豊饒な沃土がはじまつてゐる。堤防の上には草がしげり、柳の垂れさがつた枝が堤防を掩ひ、さらに海岸の一部を掩つてゐる。左手前方には柳の木のあひだに一筋の小路があつて、堤防へのほつてゐる。海岸には、中央、前よりに、白塗りの、底の平らなボートが引きあげられ、その軸は殆んど堤防にすれすれになつてゐて、一筋の綱が堤防の上に匍ひ、一本の柳の木の幹にしつかりとゆはへつけてある。空には低く、正面、左手に、三日月の新月がかかり、柔かい、神秘的な、愛撫するやうな光を、萬物に投げかけてゐる。海岸の

砂は青白く微かに輝いてゐる。中央より左手にあるボートの前半分は柳の木の投げる深い影の中であり、艫の部分は月光をあびてゐる。遠くから、サンマー・ホテルのオーケストラが、時々ごくかすかに聞えてくる。リチャードがボートの艫にちかく、舷縁ふなばりに横むきになつて腰かけてゐるのが見える。彼は左手を向いて、小路に目をやつてゐる。ひどく何か待ち設けてゐるらしい様子で、狭い舷縁の上に掛け心地が悪るさうに體を動かしたり、いら立たしさうに砂を蹴つたり、派出不いゝのバンドのついた麥藁帽子を指先でくるくる廻したりしてゐる。

リチャード (考へごとを口に出して) もうきつと九時だ……市役所の時計の打つのが聞えるだらう……静かだな、今夜は……ふん、きつとママつたら、僕のこつそり脱けだしたのが分つて、發作をおこしてゐるにきまつてゐる……歸つたらうんとひどい目に會はされるだらう。しかし、それだけの値打はあるさ……ミューリエルが現はれさへすれば……間違ひなく來る自信があるとは言はなかつたぞ

……畜生、来てくれればいいが……たしか九時つて書いてあつたはずだが……
(彼は麦藁帽子をポートの真ん中の坐席において、ポケットから折りたたんだ手紙を出して、月の光でそれを覗いてみる) さうだ、やつぱり九時だ。(手紙をポケットへしまはうとし、それをやめて、手紙に接吻する——それから、あわてて恥しさうにしまひこみ、誰かが見てゐやしないかと恐れでもするやうに、顔を赤らめながら、あたりを見廻す) 何だつて馬鹿な真似をするんだ……いやいや、決してさうちやない……本當に愛してゐるんなら、馬鹿げてゐることがあるもんか……(いら立たしさうに、つと立ちあがる) 畜生、早く来てくれればいいのに……何かほかのことを考へろ……さうすりや時間の過ぎるのが早いよ……僕は昨夜この時間にどこにゐたかな……楽しい海濱ホテルの外で待つてゐたんだ……ベルか……ああ、あんな女のことなんか忘れてしまへ！……今、ミューリエルが来ようといふのに……ミューリエルのことを考へるには、今がすばらしい時だ！……だが、お前はベルを抱きしめてキスしたんだ……酔ふまでは、そんなことし

なかつたのに……あれはみんな虚勢を張つてしたことなんだ……大馬鹿めが！
……しかし、僕は一しよに二階の部屋へ行かなかつた……たとへあいつがきれいだったとしても……いや、あいつ、きれいちやなかつた……あいつ、眞つ白に塗りこくつて……淫賣そのものぢやないか……全く汚らしい奴だ……そこへゆくと、ミューリエルの方が何萬倍きれいだかしのれない……ミューリエルと僕は二階へあがつてゆく……結婚したら……そいつあ美しいだらうなあ……だが、いけな、まだそんなこと考へちやいけななんだ……そいつあよくないよ……僕は決してそんな——今は……ミューリエルだつて決して……ミューリエルはちやんとした娘だ……もしさうでなつたら、戀なんかするもんか……しかし、二人は結婚したら、そしたら……(彼は情熱的な渴望ですこし身をふるはせ——それから、この淫らな、殆んど神聖をけがす想念から、斷然として心をそらす) あのないましいパーテンの奴、僕を蹴りあがつて……もし僕が酔つぱらつてゐなかつたら、奴の鼻つ面に思ひつきりパンチをくらはしてやつたんだがな……あとで奴にのさ

れちまはうと……（それから、屈辱の急激な反作用と自己厭悪に身ふるひして）ふん、貴様はズボンのお尻を蹴つとばされるだけのことはあるんだ……あんなだらしないことをしたんだもの……あんな低級な奴らにむかつて、レッディング牢獄の歌を朗讀するなんて！……貴様がうちへ歸つたときはさぞ見事なざまだつたらうよ……ベッドへねかしつけてもらふし、氣持が悪くなるし……べつべつ！……（不快さうに體を動かす）何かほかのことを考へることができないのか、ええ？……何か朗讀でもしよう……覚えてゐるかな……

いざ共に歩みいらん、火より火へ、

情熱の苦痛より死のごとき歡喜へ——

われい、愛欲を離れて生きんにはあまりに若く、

御身もこの夏の夜を空しく過さんにはあまりに若し——

……うん、すてきな詩だ！……あとの部分も暗記して、今度ミューリエルに朗讀してきかせてやらう……ああ、詩が書けるといいんだがなあ……ミューリエル

や僕のことを歌つた……（溜息し、あたりの夜を見廻す）ほう、美しい晩だなあ……まるで僕やミューリエルのために……別あつらひの晩でもあるやうだ……今夜は實にいい夜だ……いいなあ、砂も、木も、草も、空も、月も……それはみんな僕のなかにあるんだ。そして、僕はまたその中にあるんだ……神よ、何て美しい夜なんでせう！（彼は恍惚とした顔で月を見詰めながら立つてゐる。遠くで市役所の鐘が九時を打ちはじめ。この音にはつととして彼は現實に引き戻される）九時だぞ……（小路の方を氣づかはしげに覗きみる）ミューリエルの姿が見えない……きつと、つかまつたんだ……（殆んど泣かんばかりになつて）ああ、うちへ歸つて、ひどい目にあふのはいやだな……彼女に會はないで！……（大人っぽい冷笑の助けをかりて）ふん、女が一體時間どほりに來たためしがあるといふのか……僕だつて、この年までに人生について十分知つてはすぢやないか。だから、期待などするもんか……（それから突然、昂奮して）やあ、來たぞ……ワアツ！（ほつとした大きな溜息をついて——近づいてくる姿に目を向け

ながら、ひとりで劇的に朗讀する)

おお、見よ、わが戀人、わが魂の戀人、

わが魂よりもいとほしく、神よりもうるはしく、

わがいのちをその手にしかと握りし戀人よ——

(それから、大急ぎに) 僕がすっかりうれしがつてゐるのを知らせない方がいいぞ……とにかく、あの最初の手紙のことを持ち出したほうがいいんだ……女つてものは、お前をすっかり自分のものだと思つて安心すると、お前を奴隷のやうに扱ふんだ……ひとつ氣を變へて、あいつを苦しめてやれ……(誇張した無關心な態度で、あたりをふらふら歩きはじめ——小路に背を向け、兩手をポケットに突っこみ、何氣ないふりで「教會で待つて」を口笛でふきながら。)

ミューリエル・マッコーマーが、左手前方の小路をおりてくる。彼女は満十五歳で、間もなく十六歳になる。彼女はまるまると肥つた、なよやかで小柄な、可愛い娘で、軟かい淡褐色の髪、大きい無邪氣なおどとした

やうな黒い目、えくぼのある圓い顔、甘えるやうなろのろした聲をしてゐる。丁度今、彼女はおつかかなびつくり冒險するときの、びくびくした状態にゐる。小路から降りたつた木かげのところに、ためらひながら立ちどまつて、リチャードが自分の方を見てくれるのを待つてゐる。しかし、彼は斷乎として背を向けたまま口笛を吹きつつけてゐるので、彼女の方で聲をかけないわけにはゆかない。

ミューリエル　もし、ディック。

リチャード　(深い瞑想にふけつてゐる最中を邪魔されたやうに、わざと見せかけて、ふりむく) よう。もう九時かい。おやおや、時間のたつのは早いなあ——考へごととしてゐると。

ミューリエル　(彼の方へ進みよるが、木蔭のはじめのところまでしか行かない——失望したやうに) 路のつきる、ことごとくで待つて下さるかと思つたわ。きつと、あたしがここへ來ることさへお忘れになつたんでせう。

リチャード (すこし彼女の方へぶらぶら歩いてゆくが、あんまり近よらずに——冷淡に) いや、忘れやしないよ、本當に。だけど、僕、人生について考へてゐたんだ。

ミューリエル あたし、あなたに會はうと思つてこんなに危険をおかして來たんですもの。氣持を變へて、あたしのことだつて考へて下すつたつていいでせう。(木蔭のはじめのところにおどおどためらひながら) ディック! こつちへ來てよ。そんな明るい月の中へ出てゆくの、誰かに見られやしないかと思ふと怖いわ。

リチャード (彼女に近より——輕蔑するやうに) そら、また始まつた——君つたら、しよつちう人生を怖がつてゐるんだ。

ミューリエル (憤然として) ディック・ミラー、あたしがかうしてお會ひする約束をしたり、こつそり家を脱けだしたり、するぶん危険を冒してゐるのに、そんな風におつしやるなんて、本當にひどいと思ふわ。あなたつたら、あたしにこ

つそり手紙をよこさうとさへなさらなかつたぢやないの。

リチャード そりやさうさ。だつて、君の最初の手紙を見てから、僕たち二人のあひだのことは、みんな死んでしまつて、過ぎさつてしまつたと思つたんだ。

ミューリエル そして、さうなつても、あなたは何とも思はなかつたんでせう。きつとさうよ。(屈辱の涙を流さんばかりになつて) ああ、あたし、ここへやつてくるなんて馬鹿だつたわ。あたしにだつて、ちやんと考があるわよ。すぐうちへ歸つて、あなたとはもう二度と口をきかないから。(半ば小路の方へふりむく。)

リチャード (びつくりして——すぐに恐ろしく眞面目になり——彼女の手をつかんで) あッ、行かないで、ミューリエル! お願ひだ! 僕、そんなつもりで言つたぢやないんだ。本當にそんなつもりぢやないんだ。ねえ、あの最初の手紙で僕がどんなに打ちのめされたか、分つてくれさへしたら! そして、二度目の手紙で僕がどんなに有頂天になつたか——!

ミューリエル (幸福さうにほつとして——しかし、今度は自分の方が先手に廻つたのを知つて、すぐには寛大にならずに) そんなこと信じられないわ。

リチャード 僕がどんなに有頂天になつたか、ミッドにきいてごらん。あれが證明してくれるから。

ミューリエル あの人はあなたに言へつて言はれたとほり言ふでせう。あたしには、あの人の言ふことなんかどうだつていいわ。大事なのは、あなたよ。あなたが、あたしに誓つて下さらなければ——

リチャード 誓ふよ、僕。

ミューリエル (眞面目くさつて) では、ようございます。あなたを信じますわ。

リチャード (愛情をこめて彼女の顔を眺め——聲には崇拜そのものの念が現はれてゐる) ねえ、ミューリエル、今夜は君はきれいだね。この前會つてから、ずいぶん會はなかつたやうな氣がするよ。僕がどんなに苦しんだか、君にわかつ

てもらへさへすれば——!

ミューリエル あたしだつて苦しんだわ。

リチャード (一瞬間、例の悲愴な文學的なポーズに落ちいるのを制することができないで) わが魂の絶望—— (劇的に朗讀する) 「どの男の心にも、何かがあるんだ。そして、死んだのは希望だつた。」それが僕だつたんだ。僕の幸福への希望は死んだんだ。(それから、子供らしい眞剣な熱情をこめて) ああ、ミューリエル、君とまた會へるなんて、實にすばらしいよ! (不器用におつおつと彼女に片手をかけて抱く。)

ミューリエル (恥しさうに) あたし、うれしいわ——あなたを幸福にしたんで。あたしだつて幸福よ。

リチャード どう——キスさせてくれない——ねえ? お願ひ! (顔を彼女の顔へ近づける。)

ミューリエル (頭をひよいとそらして——臆病さうに) いけないわ。駄目よ、

そんな——

リチャード どうしていけないんだい。

ミューリエル だつて——怖いんですもの。

リチャード (がっかりして——彼女を抱いてゐた手を放し——すこしすねて、彼女をちれつたがつて) 君の言ふことときたら、いつでもそれだ。君はいつだつて怖がつてゐるんだ。どうしても僕にキスさせないつもりなのかい。

ミューリエル いいえ——そのうち。

リチャード いつ?

ミューリエル すぐに、多分。

リチャード 今夜、ええ?

ミューリエル (はにかんで) さうねえ。

リチャード 約束する?

ミューリエル 約束するわ——まあね。

リチャード よし。いいかい、約束したよ。(それから、御機嫌をとるやうに) ねえ、ここに立つてたつて仕様がないう。さあ、向うへ行つて、ボートの中へ坐らうぢやない?

ミューリエル (ためらふやうに) あすこ、あんなに明るいぢやないの。

リチャード 誰も見てゐやしないよ。夜になると、ここいらへは誰も來やしないこと、君だつて知つてゐぢやないか。

ミューリエル (論理に合はない言ひかたで) ええ、知つてゐるわ。だから、ここが一番いい場所だと思つたのよ。でも、誰かゐるかもしれないぢやないの。

リチャード (彼女の手をとつて、やさしく引っぱりながら) 人つ子ひとりゐやしないよ。(ミューリエルはすこし歩みでて、恐ろしさうにあつちこつち見廻す。リチャードは言ひはるやうに續ける) ねえ、月を見ないやうなら、月が出てゐたつて意味ないぢやないか。

ミューリエル でも、まだほんの新月でせう。眺めるほどのことないわ。

リチャード だけど、僕は君の顔が見たいんだよ。このかげぢや駄目なんだ。僕

はね——君の美しさを全部——飲みほしてしまいたいんだよ。

ミューリエル (これに逆ふことができずに) ぢや、いいわ——でも、ほんの二三分しかゐらないわよ。(彼の導くままにボートの櫓の方へゆく。)

リチャード (嘆願するやうに) ねえ、しばらくならいいだらう。ねえ、お願いだから。(彼は彼女に手をかしてボートにのせる、彼女は船尾の席に腰をおろし、左手前方にむかつて斜の向きになる。)

ミューリエル ほんのしばらくよ。(彼は彼女のそばに掛ける) でもね、あたし、十時までにはうちへ歸つてね、また寢床へはいつて、寝たふりをしてゐなくぢやならないのよ。十時になるとね、パパとママは、ゼンマイ仕掛のやうに正確に寢床へゆくの。そして、ママつたら、きまつてあたしの部屋をのぞくのよ。

リチャード だけど、それまでには時間がどつさりあるぢやないか。

ミューリエル (昂奮したやうに) ディック、あたし今夜ここへくるのにどんな

思ひをしたか、あなたには考へもつかないでせう。まあ、とてもはらはらしたわよ。パパはね、あたしを罰として八時きつかりに寢床へ押しこめちまふの。だから、あたしね、着物をすつかり脱いで、床にはいらなくぢやならないの。だつてね、八時半になると、パパはね、あたしが言ひつけどほりにしたか、ママを見によこすんですもの。今夜もママがあがつてきたんで、あたしね、眠つたふりをしてゐたの。するとね、ママ、下へおりていつたんで、あたしね、起きあがつて、それこそ大急ぎで着物をきたのよ——きつと變な恰好してるでせう、ねえ？

リチャード そんなことあるもんか。君はすばらしいよ。

ミューリエル それからね、あたし、裏の階段をこつそり下りたの。するとね、あの古ぼけたいやな階段つたら、きいきい言ふでせう。あたしね、とてもびくびくしたんで、心臓がね、ロン中まであがつてくるやうな氣がしたわ。それからね、裏庭へ出て、木かげの暗いところばかり歩いて、こつそり脱けだしてきたのよ——まあ、とつてもはらはらしたわよ。ねえ、ディック、あたしね、あなた

のためにどんな罰をうけたかお分りにならないでせう。パパだったらね、とて
も下劣で、いやらしいのよ。あたし、パパを憎みたいくらいるの氣持になつて
るの。

リチャード 君だつて分つてやしないんだよ——僕が君のためにどんな目にあつ
たかつてことが——それから、僕がこつそり脱け出したために、今どんな状態に
あるか——(陰氣に)そして、昨夜、僕が何をしたか——君の手紙を見たため
に、何をやつたかつてことが。

ミューリエル (彼の不吉な調子で、ひどく好奇心を感じて) あたしの手紙を見
たんで、何をしたのよ?

リチャード (このことで得意になりはじめて) 話せば長きことながらだよ——
しかし、死したる過去は、死として葬りされよだ。(それから、本當の心持で) ね
え、過ぎさつたことはどうでもいいから、これから先のことだけ話しようよ。僕
パパにつかまつたらどうなると思ふよ?

ミューリエル 話して、ディック! はじめからすつかり話して!

リチャード (悲劇的に) それがさ、君んとこのあの老ぼれの——君のお父さん
が歸つたあとで、僕はパパからさんさんやつつけられたんだよ。全く地獄の責め
苦さ。

ミューリエル ディック! そんな罰當りな言葉つかふもんぢやないわ。

リチャード (陰鬱に) 地獄とでも言はなきや言ひやうがないよ。それに加へて
さ、地獄の責め苦を一さうひどくしたのは、パパが君の手紙をよこしたことなん
だ。僕はあれを読んでからといふもの、この上生きてるのがいやになつたよ。人
生なんて悲劇じみた茶番のやうな氣がしてきたんだ。

ミューリエル 御免ね、ディック——本當に御免ねえ。でもね、あたしが本氣で
あんなこと書くはずがない位のこと、あなたにだつて分りさうなものに。

リチャード 僕にたいする君の愛情は、もう死んだものと思つたんだ。君は僕を
愛してゐなかつたんだ——僕を苦しめるために、慘酷にも僕をなぶりものにして

ゐたに過ぎないんだと——さう思つたんだ。

ミューリエル　ディック！　そんなことないわ！　そんなことないの、あなただつて知つてるぢやないの！

リチャード　僕は死なうつて氣になつたよ。僕は坐りこんで、死といふことについて考へたよ。とうと、僕は自殺しようと思つたんだ。

ミューリエル　（昂奮して）まあ、ディック！　そんな！

リチャード　いや、僕は決心したんだ。もし手近かにヘッダ・ガブラーのピストルでもあれば、見事にやつてのけてるところだつたよ。もし僕が死ねば、ミューリエルは僕の生涯を破滅させたのを悲しむだらうと、さう思つたんだ。

ミューリエル　（彼の方へすこし摺りよつて）もしあんたが死んだら！　あたしだつて死んでゐたでせうよ！　本當にさうしてよ！

リチャード　しかし、自殺は卑怯者の行爲だ。だから、僕はよしたんだ。（それから苦々しい口調に變つて）とにかく、僕はひとり考へたよ——ミューリエルに

は自殺するだけの値打がないつて。

ミューリエル　（むつとして）結構なお話ねえ！

リチャード　だつて、君があの手紙に書いてあるやうに思つてゐるものとしたら、君には僕が自殺するだけの値打がないぢやないか。ええ、さうぢやないか。

ミューリエル　だけど、あれ、パパが書かしたんだと言つてるぢやないの。

リチャード　そこで、僕はひとり言したんだ——女なんてもう眞つ平だ。女なんてどいつもこいつも同じだ。

ミューリエル　あたしは違つてよ。

リチャード　もうかうなりや、何をしたつて構ふもんかと、さう思つたんだ。ミューリエルのことなんか忘れて、心とろかす遊蕩三昧の生活をおくつて、そして、この悲しみの感情を溺れ死なした方がいいんだ。僕、君の誕生日に何か買つてあげようと思つて、十一ドル貯金してゐたの知つてるだらう。しかし、今では彼女は僕にとつて死んだも同然だから、これを投げすてたつてなせいけいなんだと、

さう思つたんだ。(それから、いそいで) だけど、まだ五ドルばかり残つてゐるよ、ミューリエル。それで君に何かいいものを買つてあげられるよ。

ミューリエル (昂奮して) 贈物のことなんかどうだつていいわよ。何をしたのか、それを話して!

リチャード (再び陰気に) 暗くなつてから、こつそり脱けだして、話にきいてた低級なもぐり酒場へ行つたんだ。

ミューリエル まあ、ディック・ミラー、信じられないわ、そんな!

リチャード 楽しき海濱ホテルへ行つて、僕が来たかどうか聞いてみたまへ。さう急には僕を忘れるやうなことはあるまい。

ミューリエル (心に衝動をうけ、びつくりして) まあ、あんなところへ行つたの! あすこは恐ろしいところよ! ババがね、あんなとこ、警察の手で閉鎖すべきだと言つてよ。

リチャード (陰気に) あすこはもぐり酒場だと言つてるぢやないか。それは

「淫蕩のかくれ家」なんだよ。僕は酒場の奥の秘密の部屋へ案内されたんだ。その部屋には、僕の知りあひのプリンストン大学の四年生が一人あるきりで、ほかに誰もゐなかつたよ——そいつ、タイガー・イン(学生クラブ。タイガーはプリンストン大学の異名)の会員で、フットボール・チームの後衛なんだがね——そいつ、ニューヨークからコーラス・ガールを二人つれてきてゐて、その女達とシャンパンを飲んでゐたんだ。

ミューリエル (コーラス・ガールが出てきたので、まごついて) まあ、ディック・ミラー! で、あなたは見向きもしなかつたでせうね、そんな女に——

リチャード (無雑作に) 僕はひとりでハイボールを飲んだよ。すると、コーラス・ガールの一人が——後衛の相手ぢやない方だよ——僕を見てゐるのに気がついたので。そいつ、不思議さうな目つきで見つてゐたがね。僕にむかつて、一しよにシャンパンを飲まないか、自分のそばへ来て、坐らないかつて、さう言ふんだよ。

ミューリエル　きつと、きれいな人だつたでせうね。(それから、すこしためらひがちに)で、あなた——さうしたの？

リチャード　(悲劇的な苦々しさで)なぜ、さうしちやいけないんだい——君があの手紙でもう二度と僕にあはないつて言つてきたあとぢやないか。

ミューリエル　(涙を落さんばかりになつて)だつて、パパの言ひつけて書いたの、あなただつて分つて下さつたつていいぢやないの。

リチャード　その時は、そんなこと分らなかつたよ。(それから、一さう相手に不愉快なことを思ひ起させるやうに)ベルつて名だつたがね。眞つ黄いろな髪をしてゐるんだ——燃えるやうな、刺戟のつよい髪なんだ。

ミューリエル　きつと染めたのよ。

リチャード　そいつ、煙草を一本のんでは、また一本と、続けさまにふかすんだよ——だけど、コーラス・ガールにとつちや、そんなこと何でもないんだ。

ミューリエル　(憤然として)その人、低級で悪い女だわ。きつとさうよ。さも

なきや、コーラス・ガールになんかなれやしないでせう。煙草をのむのが、それを證明してゐるわ。(それからまた、ためらひがちに)で、どうしたの？

リチャード　(無雑作に)うん、みんなでシャンパンを飲みつづけたんだ——僕みんなに一わたりおごつたよ——それから、僕、パーテンと喧嘩して、張り倒してやつたよ。パーテンの奴、その女を侮辱したんでね。そいつね、とても體の大きな、ゴロツキみたいな奴だつたが、僕——

ミューリエル　(眼れつ面)だつて、可笑しいわね——パーテンがそんな女を侮辱するなんて！それに、何だつてそんな女のために喧嘩したの、あなたが？その女をそこへ連れてきたプリンスの^{フムバツ}後衛が、なぜ喧嘩しなかつたの？きつと、その人の方があなたよりすつと體が大きかつたでせうにさ。

リチャード　(一瞬間、言葉をとめ——それからいそいで)そいつ、その時までですつかり酔つぱらつたもんだから。

ミューリエル　で、あなたも酔つぱらつたの？

リチャード　その時は、ほんのちよつと。あとでひどく酔っぱらつたがね。(誇らしげに) 僕のうちへ歸つてきた時の様子を見せてやりたかつたよ。まさにアル中譫妄症つてとこだよ。

ミューリエル　見なくて仕合せよ。きつと、ひどい様子だつたにちがひないわ。あたし、お酒のむ人さらひ！　あなただつて嫌ひになつてたかもしれないよ。リチャード　だつて、さうなるのもみんな君が悪いんぢやないか、君が。君があんな手紙を書きさへしなれば――

ミューリエル　あたしの本心ぢやないつて言つてるぢやないのさ――(それから、ためらひがちに、しかし魅せられたもののやうに) それで、ベルとどうしたの――そのあとで――あなたがおうちへ歸る前に？

リチャード　うん、そりやね、相變らずシャンパンを飲みつづけたよ。そして、ベルは僕に一目惚れしたと言ふんだ。そばへ來て、僕の膝に腰かけて、僕にキスしたんだ。

ミューリエル　(體を硬ばらせて) まあ！

リチャード　(言ひすぎたのを恐れて、すばやく) だけど、そんなことみんな、ほんの冗談なんだよ。僕たちまたシャンパンを飲んで、結局、さようなら言つて、うちへ歸つたんだ。

ミューリエル　で、あなた、その女にキスしたの？

リチャード　ううん、するもんか。

ミューリエル　(氣も狂はんばかりに) いいえ、あなた、したんだわ。あなた、嘘ついてるんだわ。承知の上で。きつとあなた、したんだわ。(それから、涙をためて) 丁度その時刻にはね、あたしは床の中で眠れないで、どうしたらまたあなたに會へるだらうかと考へて、目を泣きはらしてゐたのに、それなのに、まあ、あなたつたら――(それから、突然、泣きながら狂亂のやうに怒つて、すくつと立ちあがつて) あなたなんて大嫌ひ！　あなたなんて死んだ方がいいんだわ！　あたし、すぐうちへ歸ります！　もう二度とお目にかかりたくない

わ！ 今度こそ本氣よ！ (ボートから飛び出さうとするが、彼は引きもどす。今やあらゆるポーズが彼から消えさつて、彼は悔恨のびくびくした状態にゐる。)

リチャード (嘆願するやうに) ミュールリエル！ 待つて！ 言ひたいことがあるんだ！

ミュールリエル 聞きたくないわ！ 放して！ 放さないんなら噛みつくわよ！

リチャード 放すもんか！ 僕のいふこと、聞いてくれなくちやいけないよ！

僕は決して——！ あッ、痛ッ！ (ミュールリエルが彼の手に噛みついたので痛む。彼は痛さのあまりはつとして本能的に彼女を放したので、彼女はすばやくボートから飛びだして、小路の方へ走つてゆく。リチャードは悲痛な絶望と傷つけられた氣持で、うしろから言ふ) よし！ 行きたいんなら行くがいい——僕に言ひたいこと言はせるだけの雅量がないんなら。僕だつて君が大嫌いだ！ 僕はべルに會ひに行くよ。

ミュールリエル (彼が自分のあとについて來ないのを見て、小路の上り口に立ちど

まつて——反抗するやうに) ちや、行つて會つてらつしやいよ——ああいふ女があなたにお好きでしたら！ あたし、平氣よ。(彼が打ち萎れてボートの體に腰かけ、腹立たしい悲しみの悲愴な姿で、物思ひに沈みながらちつと前方を見つめてゐるだけなので) 言ふつたつて言へないちやないの！ どんなことが言へるのさ。あなたはその女にキスしたつて白狀したちやないの！

リチャード いや、しないよ。あの女が僕にキスしたと言つたんだ。

ミュールリエル (嘲笑するやうに、しかし、我知らず彼の方へ一步もどつて) だつて、あなたはちつとしてゐて、キスするままだにさせておいたんでせう！ い加減言ふもんちやないわよ！

リチャード (傷つけられたやうに) いいよ。僕の言ふことをいちいち嘘だとらふんなら——

ミュールリエル (我知らずもう一步もどつて) あなたを嘘つきだと言やしないわよ。あたし、ただね——變に聞えると言つただけよ。あなたにそれが分らない

の？

リチャード 分らないよ、何にも。ただ死んでしまへたらいいと思ふだけだ。

ミューリエル (やさしく批難しながら) そんなこと仰しやつちやいけないわよ。そんなこと、いけないことよ。(それから、ちよつと間をおいて) で、あなたは、その女に戀しなかつたと言ひたいんでせう。

リチャード (嘲笑するやうに) さうさ。僕がああいふ種類の女に戀する！ 僕をどんな人間だと思ふんだい！

ミューリエル (實際的に) そんなにとつさりシャンパンを召しあがつたんなら、自分のしたこと、どうして分るの？

リチャード 氣持がしやんとしてゐたからね——あの女と一しよにゐたつて。僕は間抜けぢやないよ——君が何と思はうと。

ミューリエル (我知らず、さらに近よつて) ちや、戀しなかつたのね——その女に。

リチャード 僕、大嫌ひだつたよ。それに、ちつともきれいちやないんだ。僕、歸る前にあいつと喧嘩しちやつたよ。あんまり生意氣なんで。僕、あいつに言つてやつたよ——僕は君を愛してゐて、他の誰をも愛することができない、だから、僕を打つちやつといてくれつて。

ミューリエル だけど、あなたはたつた今、その女に會ひに行くつて仰しやつたぢやないの——

リチャード おどかしに言つただけなんだ。僕、そんなことするもんか——君が行きさへしなけりや。しかし、君が行くんなら、僕は何をするか分りやしないよ——昨夜よりもつとひどいことだつて。(それから、突然、反抗するやうに) だけど、一度や二度あいつにキスしたからつて、それが何だい？ 君に仕返しするためにしただけなんだ！

ミューリエル まあ、ディック！

リチャード へん、君が僕を批難するなんて立派なことだよ——みんな君のせい

ぢやないか。なぜ、君は率直になれないんだい。君は永久に僕から去つてしまつたと、僕はさう思ひこんだんぢやないか。君は手紙にさう書いてよこさなかつたのかい。さあ、その返事をしてくれ。

ミューリエル　だつて、パパの言ひつけで書いたんだと、何遍も言つてるぢやないの。

リチャード　パパの言ひつけどほりに書くなんて、なぜもつと智慧を働かせなかつたんだい？　君がさうしなかつたからつて、それが僕のせいなのかい？

ミューリエル　あなたが察しがつかないほど間抜けだつたのは、あなたのせいよ。パパつたらあたしの頭の上から覗きこんで、一言々言ふとほりに書かせるのよ。それぐらゐ、あなたにだつて分つたつていいぢやないの。もしね、あたしがいやだと言へば、何もかもなほのこと悪くなつてるだけよ。だから、あたしはパパの言ひつけに従ふやうなふりをしなきゃならなかつたの。さうすりや、あなたに會ふチャンスだつてあるでせう。それが分らないの、あなたには？　お馬鹿さ

んねえ。それにね、あたし、今夜あなたに會ふために、こつそり脱けだしてくるだけの勇氣あつたぢやないのさ。ねえ、さうでせう。(彼は返事をしない。彼女はさらに近づく) そりやね、あなたがあんな風なことしたのをどう感じてゐるか、あたしにも分るわよ——そのことではあたしにも責任があつてよ。だからね、あたし、許して、忘れてあげるわ、ディック——もしあなたが、あんな女に戀するなんて考へてもみなかつたと、あたしに誓つてくれるなら——

リチャード　(熱心に) 考へてもみなかつたよ！　誓ふよ、ミューリエル！　僕そんなことできるもんか！　僕は君を愛してゐるんだ！

ミューリエル　さう、ぢや——あたしもやつぱりあなたを愛しててよ。

リチャード　ぢや、こつちへ歸つておいでよ。なぜ來ないんだい。

ミューリエル　(はにかんで) おそくなるわ。

リチャード　まだ九時半にだつてなりやしなよ。

ミューリエル　(戻つてきて、恥しさうに彼のそばに腰をおろす) ええ——で

も、すぐ歸らなくちやいけないわ、ディック。(彼は片手で彼女を抱く。彼女は彼にすりよる) 御免ね——手を噛んだりして。

リチャード 何でもないよ。とてもいい氣持だった——君に噛まれただけでさへ。

ミューリエル (衝動的に彼の手をとつて接吻する) ほら! これでよくなつてよ。(自分の大膽さにすつかりあわててしまふ。)

リチャード いけないよ——羊なんかに——勿體ないぢやないか。(それから顫へながら) 君、言つたね——僕にしてくれるつて——

ミューリエル ええ、言つたわ。

リチャード 願ひだ、ミューリエル。分つてるぢやないか——僕、こんなに望んでゐるんだ!

ミューリエル さうしたら——あの人のキスを洗ひ清めて——忘れてしまふことができて——永久に?

リチャード できるとも。僕、決して思ひ出しやしないよ——君の以外には——決して君の以外には求めやしないよ——もう二度と再び。

ミューリエル (恥しさうに唇をあげながら) ちや——いいわ——ディック。(彼は顫へながら彼女に接吻する。しばらく二人の唇は合つたままである。それから、彼女は頭を彼の肩に沈め、しづかに溜息する) 月がきれいなねえ。

リチャード (彼女の髪に接吻して) 君ほどきれいなぢやないよ! どんなものだつて! (しばらく間をおいて) 僕たち結婚したらすばらしいだらうね。

ミューリエル ええ——でも、ちつと先のことよ。

リチャード 多分、僕、エールへ行かなくてすみさうなんだよ。多分パパが仕事をみつめてくれさうなんだ。さうすりや、僕、すぐに結婚できるだけのお金をためて——

ミューリエル あなたの父さんが一番いいとお考へになること、なすつた方がいいわ——そして、あたしはね、エールへ行つていただきたいわ。(彼の顔を轉

くたたきながら)可哀さうに! お父さんひどくお罰しになるかしら、どう?

280

リチャード (力をこめて) どうだか分らないが、そんなこと気にしてゐないよ! そんなことがあつたつて、今夜君に會はずにはゐられなかつたらうよ——たとへ眞赤に燃えてる石炭の上を匍はなくちやならなくとも! (それから、退いてスウィンバーンにたよつて——しかし、熱情をこめた眞剣さで) 僕といふ存在は、君の両手に握られてゐるんだ。君は「わが戀人、わが魂の戀人、わが魂よりもいとほしく、神よりもうるはしき戀人」なんだ!

ミューリエル (衝動をうけ、歡喜して) しいつ! いけないわ、そんな風におつしやつちや。

リチャード (讚美するやうに) ああ、僕は君を愛してゐる! ああ、君を愛してゐる——可愛い人!

ミューリエル あたしもあなたを愛してゐるわ——あたしの大好きな人! (二人は接吻する。それから、彼女はまた彼の肩に頭を沈め、二人は恍惚として月を眺

めながら腰かけてゐる。間をおいて——夢みるやうに) 新婚旅行にはどこへ行きませうか、ディック。ナイアガラの瀧?

リチャード (輕蔑するやうに) あんな下らないところ、馬鹿な奴らの出かけるところだよ。僕はいやだよ。(熱情的な空想で) ねえ、僕たち、どつか遠くのすばらしいところへ行かう! (キップリングに加勢を求めて) どつか遠くの長い道へ——いつも新しい道へ——マンダレーへの道へ! 夜明けがまるで稻妻のやうに支那から現はれてくるのを見よう!

ミューリエル (うつとりと、幸福さうに) すばらしいでせうね、きつと。

—幕—

第三場

再びミラー家の居間——同じ夜の十時頃。

ミラーはテーブルの左手前方の揺り椅子に、妻はテーブルの右手前方の揺り椅子にかけてゐる。月光が右手後方の仕切戸をとほして射しこんでゐる。緑色の笠のついた読書用のランプだけが火がついてゐる。その光で、ミラーは眼鏡をかけて本を読み、妻は膝に縫物籠をおいて、一心にナプキンを縫つてゐる。ミラー夫人の顔には、何の心配もない満足の表情が現はれてゐる。ミラーの顔にも、心配で心を奪はれてゐた様子は消えさつてゐるが、ふと或る疑念が心に浮ぶたびにそのとりこになる。テーブルの上の、彼の脇のそばに数冊の本が積みかさねてあるが、それはリチャードか

ら没取したものである。

ミラー (何か読んでゐたが、にたりとして——それから本を閉ぢてテーブルの上におく。ミラー夫人は縫物から顔をあげる) このショーつて男は面白い奴だね——ただどうも、思想があんまり氣狂ひじみてゐるから、かういふものは出版を許すべきぢやあるまいなあ。それから、このスウィンバーンだがね、なかなか調子のいい詩を書いてるよ——ただ、ふしだらな女のかはりに何かほかの主題を選べばいいのに。

ミラー夫人 (からかふやうに微笑して) あなただつて、さういふ本で墮落しはじめていらつしやるんぢやなくて？——リチャードにたいする義務から讀むやうなふりをしてさ。鼻をくつつけんばかりにして、夢中になつて讀んでいらつしやるんだもの。

ミラー いや、違ふ、違ふ——ただ認むべき點は認めなければいけないよ。この本には、どれもなかなかいいところがあるよ。例の、オーマー・カイヤムのルバ

イヤットにしてもだね。僕はたびたび讀んだんだが、以前に讀んだ時よりはすつと好きになつたよ——もつとも全部ではないがね。つまり、大酒をのむのを歌つた部分は困るよ。

284

ミラー夫人 (この最後の言葉のあひだ、自分の考に耽つてゐたが——ほつとした深い溜息をついて) まあ、本當によかつたわ、リチャードがどこへ行つたか、ミルドレッドが教へてくれたんで。もしあの子が教へてくれなかつたら、あたし、どんなに氣をもんだかしれやしないわ。でも、本當によかつたわ。

ミラー (ちよつと顔をしかめて) おれはまだそこまで安心できないなあ。あいつは今夜は心配がないからつて、昨夜のことまで帳消しになるわけぢやないよ。昨夜のことぢや、當然まだ罰しなくちやなるまい。

ミラー夫人 (辯護するやうに) でも、わたしに言はせていただけなら、わたしだつて一日ちゆうあの子を罰したことですし、あの子だつて自分でするぶん苦しんだことですから、受けるだけの罰は十分受けてゐるんだと思ひますよ。あの

子がすつかり後悔して、もう決してお酒を口にしないと云つてたつて、わたし、あなたにお話しましたでせう。あの子はお酒を飲んだつて、シッドのやうに楽しくなるどころか、悲しくなり、氣持が悪くなるだけなんですつて。ですから、お酒はあの子にとつて何にもいいところがないつてことが分つたんですよ。

ミラー そりやね、さういふ考が本當にあいつの頭にたたきこまれたものなら、ああいふことのあつたのを、かへつて悦んでいいかもしれぬ。百のお説教よりも効き目があつたらう。あいつとしても、ちつたあ分別ができようといふもんだ。(それから、再び顔をしかめて) それにしてもだ、あれがああいふことをやつて、しかも罰をうけずにするといふことは、僕としちや黙つてゐられないよ。それに、このことで、もう一つ心配な面があるんだが——(急に言葉を切る。)

ミラー夫人 (不安さうに) もう一つ心配な面つて、何のことですか。

ミラー (あわてて) うん、その、しつだけだよ。家庭にはしつけないものがないければいかん。食卓の上座に坐はる僕を、山案子かなんそのやうに、あれに思は

285

れたくないんだ。だから、この考をあれの心に刻みこむためだけでも、罰する必要があるよ。それに、あいつは信頼するに足りないことが分つたから、エールへは遣ることが出来ないと云つてやるつもりだ。

ミラー夫人 (すぐ反亂をおこして) エールへやることができないうですつて！
いいえ、あの子はエールへ行つていいと思ひます。町であなた位の資産のあるものは誰でも、子供を大學へやりますよ。世間であなたのことを何と思ふでせう。あなたはウィルバーだつておやりになりましたし、ローレンスだつておやりになるおつもりでしたが、本人が行きたがらなかつたのですし、アーサーだつておやりになつてゐます。ほかの子供たちが大學教育の恩恵をうけてゐるのに、リチャードだけをいぢめて、そんな――

ミラー お黙り。後生だから。僕の言ひかけたことを全部言はせたらどうだ。僕の言ふのはだ、今さう言つといて――つまり嚇かしだよ――あとになつて、あいつがちやんとしてきたら、僕の考を變へようといふんだ。

ミラー夫人 まあ、さうですか。さういふわけなら――(それから、再び辯護するやうに)でも、あの子にあらゆる恩恵をあたへてやるのが、あなたの義務ですわ。あれは特別の頭脳をもつてゐますよ、あの子は！ さういふ深刻な劇や文章や詩を読むのが好きなところからみても、たしかにそれが分りますわ。

ミラー おやおや、僕はまたお前が――(手の施しやうがないと言はんばかりに、い、い、いにたにたしながら、言葉を切る。)

ミラー夫人 わたしがどうだと仰しやるの？

ミラー いや、何でもないよ。

ミラー夫人 (鼻をふんと鳴らす、このことはこのままにしておく方がいいと考へて) わたしの言葉を覚えてゐて下さいよ――あの子はね、今に偉くなりますよ、立派な辯護士とか、立派な醫者とか、立派な作家とか――

ミラー (にたにたしながら) とにかく、あいつが偉くなるつてことには、お前も同意見なんだね。

ミラー夫人 ええ、わたしはリチャードに一番望みをかけてゐるんですよ。

ミラー うん、そりやね、その點について、僕も同じだよ。

ミラー夫人 (ちよつと間をおいて——批判的に) それから、ミューリエルの戀愛にしても、結局、うまくゆくんぢやないかと思ひますよ。リチャードだつて、もつと悪いことをしようと思へばできたんですからね。

ミラー しかし、僕はまた、お前があゝの娘を嫌つてゐて、あれを馬鹿だと考へてゐるかと、さう思つてたんだ。

ミラー夫人 そりやさうなんですけど、もしあの娘がリチャードに適してゐて、リチャードの方でもどうしてもといふんでしたら——(それから、前後の連絡なく)よくわたしの母が、あなたは頭が良すぎるほうぢやないつて言つてましたが、わたしがそんなことどうだつて構はないつてことが分つたので、考を變へてくれなすの。

ミラー (少々穩かでない) へえ、僕は頭が悪くないつもりだが、お前の夫とし

ちや——

ミラー夫人 (相手がしやべらなかつたかのやうに續ける) それに、ミューリエルつて本當に可愛い娘ですわ。それはわたしも認めないわけにはゆきませんわ。母親に似たんですねえ。アリス・ブリッグズは結婚する前は、とてもきれいな娘でしたから。

ミラー そりやさうだ。すると、何かい、ミューリエルも結婚すると、母親と同じやうに、家みたいになるのかい。そいつあ困つたね。男なんて全く、どういふのにぶつかるか分つたもんぢやないからなあ——(妻が怒つたやうな疑ひの目でちつと自分を見てゐるのを感じて、止める。)

ミラー夫人 (鋭く) わたし、肥りすぎてやしませんよ。そんなこと仰しやるもんぢやないわ。

ミラー 誰がお前のこと言つたんだい。

ミラー夫人 誰かさんみたいに、鞘筥豆のやうに瘠せて、坐るたんびに椅子に穴

をあけるのよりは、すこしは骨の上に肉のある方がようござんすよ。

ミラー (この侮辱を無視して——取りいるやうに) おいおい、エシー、誰もお前を肥つてるなんて言ふものはゐやしないよ。ただ少し、肉つきがいいだけなんだ。いい姿つてもものは當然さうなくちやならんよ。

ミラー夫人 (子供のやうに悦んで——うれしさうに、その返報をする) あなただつて皮ばかりぢやありませんわ——ただ細つそりしていらつしやるだけよ——それに、近頃、段々目方がおふえになるんぢやなくて? (かういふ具合にぢやんと勘定をつけてから、彼女は再び縫物に取りかかる。間。それから、ミラーは疑念をおこしてたづねる。)

ミラー まさかお前は、リチャードのミューリエルにたいするこの戀愛を、眞面目に考へるといふんぢやあるまいね? そりや今はおだてておくのもいいさ。だが——ちえッ、リチャードを六ヶ月もどつかへやつとけば、ミューリエルのことなんかすつかり忘れてしまふだらうし、ミューリエルのほうだつて同じことだ

よ。

ミラー夫人 そんな皮肉をおつしやらなくともようござんすよ。(それから、ちよつとの間をおいて、考へ深さうに) とにかく、あの子はいつまでも覚えてゐるでせう——あとでどんなことが起らうと——そこが大事なところですよ。

ミラー たしかにそこが大事なところだよ。(それから、にたりとして) お前は一時々、深い智慧をみせて僕をびつくりさせるねえ。

ミラー夫人 わたしだつて常識ぐらゐ持つてるの信用なさらないのね。だから、びつくりなさるんでせうよ。(再び縫物へもどる。)

ミラー (間をおいて) シッドとリリーはどこへ行つたと言つたつけね。

ミラー夫人 樂隊をききに海岸へ。(同情するやうに溜息して) 可哀さうなリリート。シッドはいつまでたつても相變らずだし、リリーは決して結婚しようとはしないし。でも、リリーつたら、家鴨の仔を孵した牝鶏のやうに、シッドのことで空つ騒ぎして、それで奇妙な満足を感じてゐるやうに思へるんですよ——わたし

だったら、とてもあんな真似はできないけど。

ミラー　アーサーはエルジー・ランドと一しよなんだらうなあ。

ミラー夫人　ええ、むろん。

ミラー　ミルドレッドは？

ミラー夫人　最近のと出かけてゐるんですよ。なんて名前だったか忘れましたがね。何せ、みんなのあとをいちいちつけてるわけにはいきませんからね。（微笑する。）

ミラー　（微笑しながら）すると何だね、あらゆる情報を総合すると、われわれはまさに戀愛によつて完全に包圍されてるつてわけか。

ミラー夫人　わたしたちだつて、分け前はもうちやんといただいたんですからね。今さらそれを子供たちに出し惜しみしたつて始まりませんよ。（それから急に思ひついて）さうさう、ミューリエルとリチャードの話はね、これですつかりすみましたが、あのマッコーマーの頑固親爺がこれは反對だつてこと、きれいに

忘れてゐましたわ。だけど、あの人だつて異存はないと思ふんだけど。

ミラー　（くつくつ笑つて）あいつ、もうその氣であるよ。午後、山の手の方で出會つたら、大将、お菓子みたいにあまくなつてたぜ。向うから折れて出て、僕の言ひ分が正しいと思ふと言ふんだ。リチャードはいろんな本から書きぬいただけで、子供はやつぱり子供だなんてね。そこで、ごつちも傲然たる態度をすこし緩和してやつたね——なに、ほんのすこしだよ——だから、この問題にはもう誰からも文句のすることはあるまい。（両手をこすりながら——うれしので子供のやうににたにたして）それから、ロースンから廣告をもらふことにきまつたよ。この話はお前にしたねえ？　けふはいい日だったよ、エシー——全くいい日だった。（表の客間の向うのホールから、玄關の戸の明いて閉まる音がする。ミラーは眼鏡を上へあげて、體を乗り出すやうにして見る。）

ミラー夫人　（囁き聲で）リチャードですよ。

ミラー　（すぐに厳格な表情になつて）ふむ。（眼鏡をはづして、ケースにおさ

め、椅子にかけたまま體をしゃんと伸す。リチャードが表の客間からゆつくりはいつてくる。彼は恍惚たる状態にある人間のやうに歩いてくる。その目は夢みるやうな幸福で輝き、その精神は依然として昂揚してゐるので、周圍を意識することも、刑罰があるぞと嚇かされてゐるのを思ひだすこともできない。片手に麥藁帽子をふらさげてゐるが、その存在を全く意識してゐない。

リチャード (夢みるやうに、幽霊が仲間呼びかけるやうな調子で) よう。

ミラー夫人 (心配さうに彼を見詰めながら) お歸り、リチャード。

ミラー (抜かりなく彼を観察しながら) よう、お歸り。(リチャードは母親のそばを通つて、明りの一番暗い左手前方の隅のところへ行つて、ソファに腰をおろし、手に帽子をふらさげたまま前方をちつと見てゐる。)

ミラー夫人 (今度はおびえたやうに疑念を抱いて) おやおや、様子が可笑しいわね! ねえ、ナット、あの子はまた何んぢやないかしら——

ミラー (安心させるやうに微笑して) いや、違ふよ。今度は酒ぢやなくて、戀

愛だよ。

ミラー夫人 (すこしは安心したものの——鋭く) リチャード! どうしたんです? (リチャードははつとして我にかへる。彼女は咎めるやうに續ける) うちへはいつたら帽子は玄關にかけときなさいつて、一體何遍言つたと思ふんです!

(リチャードは帽子の存在にびつくりしたかのやうに、それを眺める) さあ。こつちへおよこし。今度だけ、お前の代りに掛けてきてあげるから。それにお前、何だつてそんな暗いところに坐つてゐるんだね。お父さんがお前にお話があるつて待つていらしたのを忘れたのかい。(彼女はテーブルの方へ戻る。リチャードはまだ半ば夢見心地で、それに従ひ、父親の椅子のそばに立つ。ミラー夫人は帽子をもつて玄關の方へ行く。)

ミラー (今度は、おだやかに、しかし、きつぱりと) お前はしばらくあつちへ行つてくれた方がいいよ、エシー。

ミラー夫人 (振り向いて、心配さうに彼をみて) ええ——ようござんす。わた

し、ヴェランダへ出て、掛けてあますわ。御用があつたら呼んで下さい。(それからちよつと嘆願するやうに)でも、わたしの申したことみんな覚えていらつしやるでせうね。(ナットは大丈夫だと言はんばかりにうなづく。彼女は表の客間を通つて去る。リチャードはこの時まで、自分が今や正に宣言を受けんとする犯人であることを鋭く意識して、うしろめたい、すこし反抗するやうな表情をし、父親の無表情な顔を不安さうな横目でちらちら見て、まさに來らんとするものために身をかたくしてゐる。)

ミラー (何氣なく、ミラー夫人の揺り椅子をさして) お坐り、リチャード。(リチャードはぎこちなく椅子にすべりこみ、間のわるさうな不自然な姿勢で腰をかける。ミラーは鋭く彼を観察し——それから、突然、微笑し、おだやかに嘲笑するやうにたづねる) おい、今夜は頭にさした葡萄の葉はどうしたね?

リチャード (こんな風に出られようとは全然豫期してゐなかつたので——恥しさうに咳く) さあ、分りません。

ミラー ところが、案外、毒常春藤だつたんぢやないのかい、そいつは。(常春藤の花言葉は貞節とか夫婦愛とかである) (それから、やさしく) 何もさうびつくりしたやうな顔をしなくともいいんだよ。お前に節制についてのお説教をする氣はないんだから。そいつあ、お前よりも僕の方がさきに退屈してしまふだらうからなあ。それに、お前は昨夜するぶん馬鹿げた眞似をやつたが、それでも僕はお前の理性といふものに信用をおいてゐるんだ。だから、僕がお前に言ひきかせたいと思ふことは、お前の方でもう自分自身言ひきかせてゐるに違ひないと思ふんだ。

リチャード (頭をたれ——へりくだつて) 僕は馬鹿でした、本當に。

ミラー (この點を強調した方がいいと考へて——さも不快さうに) さうさ——お前は單に馬鹿だといふだけでなく、正真正銘の、愚かしい、厭惡すべ大馬鹿者だ! (リチャードは頭をたれたまま身もだえする) お前のああいふ様子を、僕やアーサーに見せるだけでも恥さらしなのに、何だ、あのさまをお母さんやミル

ドレッドにまで見せるなんて！ もしミューリエルが、お前の昨夜のやうな様子や振舞を見たとしたら、それでもお前を立派な男だと思ふだらうか。きつとお前に、永久の縁切り状をつきつけるだらうと思ふよ。それでも、お前はミューリエルを批難するわけにはゆくまい。ちやんとした娘だつたら、馬鹿げた酔っぱらひなんぞに愛情を捧げるもんか。

リチャード (身をもだえて) 分つてゐます、パパ。

ミラー (ちよつと間をおいて——おだやかに) よろしい。ちや、これで話のけりがついた——酔っぱらひの件は。(リチャードを詮索するやうに観察しながら——突然、鋭く言ふ) しかし、もうひとつ、もつと重大なことがあるんだ。お前が楽しき海濱ホテルで一しよにベッドへ行つたあの淫賣のことはどうしたんだ。

リチャード (啞然として——吃りながら) あのう、知つてゐるんですか？ しかし、僕ベッドへなんか行きません！ もしお父さんがあすこでそいつのことをお聞きになつたんなら、僕そんなことしなかつたつて、きつと言つたはずですよ。あ

いつ、僕に要求したんですが——僕、いやだつたんです。僕、その女に五ドルやつて、放免してもらつたんです。本當に、僕、そんなことしなかつたんです。あいつと一しよにゐると、何もかも穢らはしくて、きたならしく思へるんです——それに——ミューリエルのためにも、僕、そんなことする氣になれなかつたんです——ミューリエルがどんなに僕にひどく當つたにしても——僕、酔っぱらつたあとだつて、そんなことしません！ 本當ですよ！

ミラー とにかく、どういふきつかけで、さういふ女に出會つたんだね？

リチャード パパ、それだけは言へません。他人を密告することになりますから——パパだつて、僕にそんなことさせたくないでせう。

ミラー (すこしたちろいで) さうだ。さういふことはしたくないよ。ふむ。よろしい、お前を信じよう——さあ、これで話のけりがついた。(それからリチャードをちらと盗み見して、苛酷な試験に立ちむかふために勇氣を振ひおこし、恥しさうに、間のわるさうに、眞面目くさつて始める) だがなあ、リチャード、お前

とお父さんとは、或る眞面目な話をしてもいい時期なんだよ——つまり、その——あれに關する或る事柄をな——それに、その問題がそれ自身の方から起つてきたので——今が丁度いい時期なんだ——つまり、これ以上ぐづぐづ延しておいても、何にもならないといふことなんだ——だから、その話をしようと思ふんだがね。(しかし、圓滑には進行しない。彼が話をすすめるにつれ、ますます疚しいやうに當惑、間がわるさうになり、その表情は一層しかつめらしくなつてくる。リチャードは父親をちらと見るのさへ努めて避け、彼自身の當惑は父の當惑によつて十層倍も苦痛に感じられる)なあ、リチャード、お前も今では或る年齢に達したんで——つまり、或る點から見れば立派に一人前の大人になつたんだ——だから、まあ言へば、生理的な或る欲望のおきるのは、お前としてもごく自然なわけなんだ——つまり、その、異性に關してだね——或る自然な感情なり誘惑なりだね——それは充されることを欲してゐるんだ——そして、お前はそれを充すことを欲するんだ。ふむ——ところで、人間社會といふものは、現在あるがやう

に組織されてゐるんで、この問題にたいしてたつた一つの捌口はげちしかないんだ——そりやお前が不良にでもなつて、良家の子女を墮落させて歩くといふんなら、話は別だ——しかし、もちろんお前はさういふ人間ぢやない。だから、ここに或る種の女といふものが存在することになるんだ——これまでだつて存在してゐたんだし、これからだつて、人間の性情に變りがないかぎり存在するだらう——これは悪いことだよ、多分——しかし、悪いからといって、どうすることができんだ。だからだな、お前がその、さういふ女だね——ちよつとした交渉をもつ女だね——さういふ女はみんな、なかなかきれいだし、お前としても、その何だ、人間の性情なんだよ——しかし、かう言つたからつて、さういふ女と眞面目につきあへと言ふんぢやないんだよ。お前の欲するものを充し、金をはらひ、忘れてしまへばいいんだ。かういふ風にいふと、冷酷で無情にひびくかもしれないが、僕たちは事實を話してゐるんだ。しかし、お前をけしかけてゐるんだと思つちやいけないよ——さういふ女から遠ざかつてゐることができたら、それに越したこ

とはないさ——しかし、かりにだ——つい、その——ふむ——ここが肝心のところなんだ、リチャード。さういふ女はとかく「白く塗った墓場」〔聖書マタイ傳中の言葉。偽善者の意〕であることが多いんだ——つまり、お前の全生涯を破滅させるかもしれないんだ、もしもお前が病氣に——だから、その何だ、ぜひ知ってゐなくちやならないんだよ——つまり、手段や方法がいろいろあるから——（突然、これ以上進行できないので、仕方なく止める）しかしだな、お前たち若いものは、友だち同志でかういふことをいろいろ話しあつてゐて、僕よりもよく知つてゐるだらうと思ふな。僕はかういふ方面の權威ぢやないからね。僕はさういふ女とかかりあひをもつた経験はないが、お前もかかりあひをもたないとすれば、お前にとつてそんないいことはないよ。

リチャード　（父親を見ないで）僕、そんなことしようと思ひません、パパ。（それから、はつとして怒りの感情が聲に出てくる）僕がそんなことしやしないかと、お父さんどうしてお考へになつたのか、僕には分りません——だつて、今

——僕がミューリエルを愛してゐて、結婚しようと思つてゐる矢先なのに——お父さん、それを知つてゐながらさ。僕、そんなことする位なら死んぢまひます！
ミラー　（すつかり安心して——熱誠をこめて）うん、よく言つた、有難い。お前がそんな風に話すと、お父さん、鼻が高いぞ。（それから、いそいで）さあ、これで話は全部おしまひだ。もうこれ以上言ふことはない。これつきりにして、忘れてしまふ。

リチャード　（ちよつと間をおいて）僕の罰はどうなるんですか。

ミラー　そいつあ忘れるところだつた。お父さんはね、お前をエールへやることのできないつて、さう言はうと考へてゐたんだよ。

リチャード　（熱心に）僕、行かなくていいんですか。へえ、こいつあ、すてきだ。ミューリエルは、お父さんがやりたがつていらつしやると思つてゐるんです。僕はまた、パパは僕のために新聞の方に仕事を見つけて下さるだらう、さうすりやミューリエルと僕はすぐにも結婚できるだらうつて、さう話してゐたん

です。(子供らしくにたりとして)ねえ、パパ、折角の名案も利き目なしつて
ところですね。それちや罰になりませんよ。何かほかのことをなさらなくちや。

ミラー (ひどく眞面目くさつて——しかし、ついにここにこしたくなるのを隠し
切れずに)ちや、お前はエールへ行つて、卒業するまでそこにゐるんだ。それが
返事だ。ミューリエルは分別をもつてゐるが、お前はもつてゐないぞ。(リチャ
ードは神妙にこれを受けいれる)もう話はすんだから、お母さんと呼んだ方がいい
よ。(リチャードは仕切戸を開けて、「ママ」と呼ぶ。すぐ彼女ははいつてくる。
息子から夫へと素早く目を移し、萬事うまく行つたのをすぐ知つて、如才なくあ
らゆる質問をさしひかえる。)

ミラー夫人 まあ、とても美しい晩ですよ。月が低く空にかかつて——今にも沈
みさうになつてゐて——。(彼女は椅子に腰をおろし、満足さうに溜息する。

リチャードは戸口のそばに立つて外の月を眺めてゐる。その顔は月光をあびて青
い)

ミラー (妻に目配せしながら、リチャードの方をうなづいて見せて)さうだ
な、かういふ美しい晩が今までにあつたやうに思へないな——こんなすばらしい

月の出てゐる——どうだい、リチャード?

リチャード (二人の方へ振りむき——心から)ええ! すばらしかつたな——
あの下の海岸では——(急に言葉を切り、恥しさうに微笑する。)

ミラー (息子をしげしげと見ながら——ちよつと間をおいて——しづかに)お
父さんはね、今夜のやうに美しい晩を幾晩か思ひだすことができるよ。すゐぶん
昔のことで、お母さんも僕もまだ若くて、結婚の計畫を立ててゐた頃だよ。

リチャード (しばらく不思議さうに父親を見てゐたが、それから素早く視線を
母親に移し、また父親へもどし、二人をこれまでに見たことがなかつたかのやう
に、不思議さうに眺める——それから、厭悪を感じたやうな表情になり、何か辛
いものでも味はひでもしたかのやうに唾をのみこむ——しかし、それから突然、
その顔はひそかな理解と同情で輝く。彼は恥しさうに話す)ええ、きつとすばら

しい晩だつたでせうね。お父さん、忘れていらつしやるんぢやないかしら、月はその時も今も同じだつてことを——それから、すべてのものも。

ミラー (かすれ聲で) お前の言ふとほりだよ、リチャード。(彼は立ちあがつて鼻をかむ。)

ミラー夫人 (愛情をこめて) お前は本當にいい子ですよ、リチャード。(リチャードはこの言葉でひどく恥しさうな、きまり悪さうな様子をする。父親がそれを救ひにくる。)

ミラー なあ、リチャード、今夜は早く寝た方がいいよ。

リチャード 僕、眠むれさうもありません。ヴェランダへ出て、しばらく椅子にかけてちやいけませんか——月の沈むまで。

ミラー いいとも。ちや、今、お休みを言つた方がいいなあ。お母さんはどうするか知らないが、僕はすぐ寢床へゆくつもりだ。ひどく疲れたから。

ミラー夫人 わたしも休みますわ。

リチャード (母親のところへ行つて、接吻して) ママ、お休み。

ミラー夫人 ああ、お休み。夜中まで起きてちやいけませんよ。

リチャード (父のところへ来て、きごちなくその前に立つて) お休み、パパ。

ミラー (彼に片手をかけて、抱いて) お休み、リチャード。(リチャードは、衝動的にふりかへつて、父親に接吻する——それから、急いで仕切戸から出てゆく。ミラーはそのうしろ姿をちつと見てゐたが——しやがれ聲で言ふ) あいつがこんなことをしたのは、この數年來初めてだ。僕は、或る年齢をすぎて以後の、父と子の間の接吻といふものをあまり好かないんだ——何だか女々しくて馬鹿げてるやうに思へて——しかし、今のは悪い氣持ちやなかつたよ。それに、あれももうへまなことをやるやうな心配はあるまいと思ふよ——二度と再び。人生がどんなにあいつに辛く當ることがあらうと、なあに、もう今では、あいつは立派にそれを切りぬけてゆくことができるよ。(満足さうに溜息し、椅子にかけて、靴の紐を解きはじめる) 畜生、足の奴、さんさんおれを苦しめあがる。

ミラー夫人 (笑ひながら) 何だつて今、靴を脱がうとなさるの、大きなお馬鹿さん——すぐ寢床へ行くんちやありませんか。

ミラー (そのことを今まで気がつかなくつたかのやうに紐をとく手を止める) さうか、お前の言ふとほりだ。(それから立ちあがつて——にたりとして) 今夜はお祈りをあげなくともいいだらう、エシー。僕がすっかりくたびれてゐるのを、神様だつてきつと御存知だよ。

ミラー夫人 そんな風におつしやるもんぢやないわ。本當に罪深いことですわ。(立ち上がり——愛情のこもつた笑ひ方をして) あなたつたら、いつでもこんな風だから困りますわ。始終、言譯ばかりさがして——トミーよりもたちが悪くつてよ。でも、ようござんすわ。今夜はお祈りなさらなくともいいでせう。今日いちにち、ずるぶんお働きになつたんですもの。(読書用ランプのスイッチに手をかけて) 明りを消しますよ。ようござんすか。

ミラー いいとも。消していいよ。(彼女はランプを消す。それに續く暗闇の中

へ、仕切戸を通して、微かな月の光が一ぱい射しこむ。二人は表の客間の方へ肩を並べて歩いて行つたが、しばらく月光の中に立ちどまつて外を見る。ミラーは片手で彼女を抱き、低い聲でいふ) ほら、あすこにゐるよ——あいつ、若き戀の夢の像つていつた具合だ。(それから、溜息し、靜かな郷愁的なメランコリーのこもつた聲で) ルバイヤットで言つてる通りだよ。——

あはれ、春の日の、薔薇とともに消えんとは!

青春の匂ひかくはしき一卷の閉ざされんとは!

(それから、メランコリーを振りすて、彼女に愛情にみちた微笑をむける) さうだ、春がすべてではない。さうぢやないか、エシー。秋だつて語るべきことが多いよ。秋には秋としての美しさがある。そして、冬だつて——もしお前が一しよにゐさへすれば。

ミラー夫人 (簡単に) ええ、さうよ、ナット。(彼に接吻し、二人は靜かに月光の中から出て、表の客間の暗闇のなかへ歸つてゆく。)

——幕——

註

(一) ネーサン George Jean Nathan (1882——)——巻頭の献詞にあるこの人は、オニールと同時代の批評家で、彼の親友。演劇批評家として多くの新聞雑誌に鋭い批評をのせ、著書も多く、アメリカ演劇の水準を高め、観客の趣味の向上せしめるために、絶えず努力し來つた功績はきはめて大きい。

(一) 第一幕一八頁において、シッドのうたふ歌の原文は次の二行である。

Dunno what ter call 'im

But he's mighty like a Rosevelt.

あいつの名前は知らないが

ローズ・ヴェルトにそっくりだ。

これは Mighty like a rose という次の流行歌の替歌である。

Sweetest little fellow

Everybody knows

Don't know what to call her

But she's mighty like a rose

誰でも知つてゐる

可愛い娘

何て名前か知らないが

薔薇ロゼットにそっくりそのままだ。

シッドは既座にこれをもちつて、「彼女」を「彼」に變へて歌つたのだが、この可笑味を翻譯で移すことは殆んど不可能である。

(1) ルバイヤット Rubaiyat —— ベルシヤの詩人にして天文學者オマー・カイヤム Omar Khayyam の四行詩集。フイツジェラルド Edward Fitzgerald (1809—1883) によつて英譯されて非常に有名になる。この英譯の初版は一八五九年に四折版フォールドの小冊子として刊

行されたが、それには四行詩七五章が収録されてゐる。ついで一八六八年に再版が刊行されたが、これは初版のものを相當書き改めて、詩の数も三五章ふやして、合計一一〇章になつてゐる。さらに一八七二年に第三版が刊行されたが、これは再版よりも詩の数が九章すくなくなつてゐる。

オニールの使用したのは、どの版であるか明らかでないが、字句からみて初版でないことはたしかで、再版か第三版のものであらうと思へる。戯曲中にルバイヤットから引用されてゐる詩は次の通りである。

1 「ああ、汝よ、陷穽トラップと係蹄ホースもて」とそれにつづく一行。(四三頁)

2 「指は動きては書き、書きては」に始まる四行。(四四頁)

3 「ここ木蔭には、ひと巻の詩集」に始まる三行。本戯曲に書いてない最後の一行は

「ああ、荒野もまさにバラダイス」(四五頁)

4 「飲めよー 汝、いづくより、なぜに來たりしか知らざれば」以下二行。(一四〇頁)

5 「きのふ備へたり、この日の狂亂に」とそれにつづく一行。(二〇九頁) この二行に

4 の二行がつづいて一章をなしてゐる。

6 「あはれ、春の日の、薔薇とともに消えんとは！」とそれにつづく一行。(三〇九頁)これにつづく後半の二行は次のやうである。

木々に歌ひしナイチンゲールの

またいづこよりいづちへ飛びさりしか、誰か知る。

(一) スウィンバーン Algernon Charles Swinburne (1837—1909) はイギリスの詩人にして文藝批評家、戯曲の作品もある。「詩と民謡」三輯その他多くの詩集があり、その詩は韻律においてすぐれ、自由奔放に肉慾をうたつたものが多い。「アナクトリア」は「詩と民謡」の第一輯にある。

1 「わが命、君ゆえに傷む」以下三行。「酒のこと君が血を吸り」以下四行。これは「アナクトリア」の一部。(六一頁)

2 「おお、見よ、わが戀人」以下三行。これは Laus Venenis から引用。(二五二頁)

(一) 「レディング牢獄の歌」The Ballad of Reading Gaol ——イギリスの耽美派の詩人ワイルド Oscar Wilde (1856—1900) の長篇詩。ワイルドは小説としてドリアン・グレイの繪姿、戯曲として「サロメ」「ウインダムミア夫人の扇」「眞面目であること的重要性」などがある。

本戯曲において「レディング牢獄の歌」から引用したものは次のやうである。

1 「どの男も己が愛するものを殺すのだ」以下二行。(一六九頁)

2 「或るものは苦き目差しても」以下四行。(一六九頁)

3 「幽霊は叫んだ」以下六行。(一七〇頁)

4 「どの男の心にも何かが死んだ。そして、死んだのは希望だった。」(二五七頁)

(一) キップリング Rudyard Kipling (1865—1935) はイギリスの詩人にして小説家。男性的で率直な作風。本戯曲中、キップリングからの引用は次のやうである。

1 「僕は心から彼女を愛してゐたので、そんなことはしたくはなかつたのだ」以下二行。

これは「婦人たち」と題する詩の一部。(一六七頁)

2 「女は所詮女にすぎぬが……」の引用句は、女と葉巻との良さを比較した「許婚」と

第四幕第二場の最後の部分は、「長い路」と「マングレー」から引用したもので、「長い路」には「長き路に——いつも新たなるかの路に」といふ句があり、「マングレー」には

「夜明けが、濤を横ぎつて支那から稻妻のやうにやつてくる」といふ句がある。(三八一頁)

(1) Shaw—George Bernard Shaw (1856—) はイギリスの大戯曲家で、戯曲の数が非常に多い。本戯曲に引用されてゐる作品は二つとも割合初期のもので、評論「イブセン主義の眞髓」は一八九一年、戯曲「キャンディダ」は一八九四年の作である。「キャンディダ」からの引用は、同戯曲の大詰(第三幕)の幕切れ近くにあるセリフであり(九二頁)、「彼らは詩人の心の秘密を知らない」といふ句は、同じく第三幕の最後のト書である。(九三頁)

(2) 「ヘッダ・ガブラー」 Hedda Gabor—ヘンリック・イブセン Henrik Ibsen (1828—1906) の四幕の戯曲(一八九一年発表)。女主人公のヘッダはガブラー將軍の一人娘である。父は生前裕福にくらしめてゐたが、清廉な人とみえて死んだ時には一對のピストルしか残つてゐなかつた。ヘッダは美貌の持主であつたが、非社交的で厳格な家庭に父親ひとりの手で育つたので、我儘で負けん氣の、冷たい利己的な女になつてゐた。彼女は文化史を研

究してゐる學究テスマンと結婚したが、小心で嚴直な夫に満足しうるはずがない。彼女の幼なじみで娘時代には戀らしいものもしたことがあるアイレルト・レヴボルクは、天才肌の男で、酒色に耽る奔放な生活をしてゐるが、テアといふ女の精神的・物質的な援助で文化史に關する著述をあらはして大分評判がいい。今や彼は夫テスマンと大學教授の地位をあらそふ競争者となつて現はれる。しかも、テアは彼女と女學校友だちである。ヘッダはレヴボルクにたいする愛着といふよりは、負けん氣と自尊心からしてこの二人を破滅させようとする。男たちを獨身會へ酒をのみに出してやつて、ヘッダはテアに向つてかう言ふ。「あの人は十時頃に歸つてくるでせう、髪に葡萄の葉をさし、顔を眞つ赤にし、上機嫌で。」レヴボルクは酔つぱらつて、大事な研究の原稿を落してしまつた。ヘッダはそれを手に入れ、焼きすてて、絶望してゐるレヴボルクにピストルを與へて自決を促す。彼は自殺する。ヘッダはピストルが證據として残つたので、彼女も自決する外はない。

本戯曲における引用はこの説明で明かなやうに、「ガブラー將軍のピストル」(二三五頁・二六四頁)はガブラー將軍が娘ヘッダに残していつたピストルであり、一七一頁の引用は第二幕の幕切れのヘッダのセリフであり、二〇一頁の引用はこのセリフを書きかへたものである。

終